



2017 年度

# 国際社会実習報告書

台湾・オーストラリア・北京・香港 / マカオ・魚梁瀬



**2017年度  
国際社会実習報告書**





# 国際社会実習報告書

## 2017年度

### 【Contents】

発刊にあたって .....	01
国際社会実習（外国語実習）Ⅰ .....	02
2017 年度 台湾・開南大学夏期中国語・台湾文化研修への参加	
国際社会実習（外国語実習）Ⅰ .....	06
English Immersion Study Tour：Sun Pacific Collage, Cairns, Australia	
国際社会実習（外国語実習）Ⅱ .....	46
「2017 年度 北京スタディツアー」報告書	
国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ .....	63
「国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ」実施報告	
国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ および国際社会実習（国内調査実習）Ⅰ .....	76
「国際社会実習（スタディ・ツアー）」および「国際社会実習（国内調査実習）」について	



## 発刊にあたって

本書は、高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース／人文学部国際社会コミュニケーション学科で2017年度に開講された「国際社会実習」の実施報告である。本コース／本学科では、海外実習科目を、《①スタディ・ツアー、②外国語実習、③国内調査実習、④海外調査実習、⑤フィールド・リサーチ》という5つの科目群へと段階的に整理し、学生のニーズやレベルに応じて国際実習の充実・体系化を図っている。2017年度は、香港・マカオにおける「国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ」が実施され、台湾およびオーストラリアでは「国際社会実習（外国語実習）Ⅰ」が、中国において「国際社会実習（外国語実習）Ⅱ」が実施された。さらに高知県中芸地域において「国際社会実習（国内調査実習）Ⅰ」が実施された。各実習へは、複数のコース／学科をまたいで学生たちは参加している。

本書は実習の実施時期の早い順から構成され、いずれも教員による活動概要・成果の総括と、参加学生による体験レポートが収められている。特に、学生自身によるレポートに注目すると、台湾および中国における外国語実習では、中国語の学習のみならず、現地での実践を通じた運用能力向上が図られると同時に、現地の社会や文化への理解を深め、渡航前の“思い込み”が払拭される様子も記されている。オーストラリアでの外国語実習では、英語以外の言語使用を禁止された状況のなかで集中的に英語学習に取り組み、英語コミュニケーション力の急成長する様が記されている。香港・マカオでのスタディ・ツアーの参加者たちは、現地での交流や町並み、食文化などの経験を通じて植民地の歴史とその後の影響や、日本との関係性について深く考える契機となったようである。また、日本遺産に認定された高知県中芸地域を対象とした国内調査実習では、森林鉄道に関わった世代への聞き取り調査から当該地域の「生きた歴史」を学んだ様子が記録されている。詳細は本論に譲るが、いずれのレポートも、現地に飛び込むことでしか得られない「越境する学び」の一端を読み取ることができる。国内外での実習に関心のある学生・教員の方々には、本書をぜひ手にとっていただき、大小にかかわらずコメントをお寄せいただけると幸いである。

最後になったが、今回の実習の企画・実施に際しては、多くの関係者の方々より多大なるご支援・ご協力をいただいた。この場を借りて、御礼申し上げたい。併せて、本報告書は人文社会科学部長裁量経費からの補助を受けて発行されたものであり、ここに感謝の意を記したい。

2018年7月6日

高知大学  
人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース長  
人文学部国際社会コミュニケーション学科長

遠山茂樹

## 2017 年度 台湾・開南大学夏期中国語・台湾文化研修への参加

高知大学人文社会科学部人文科学コース

吉尾 寛

### I 本実習の趣旨

本実習は、台湾の人文社会科学部協定校、私立開南大学（桃園市）主催「2017 年度開南大学夏期中国語 / 英語・台湾文化研修」（実習期間：2017 年 8 月 17 日～ 30 日）の中国語コースに参加したものである。この研修の趣旨は、語学能力のブラッシュアップとともに、開南大学の学外において台湾の文化（多様な民族の芸術、宗教、食文化等）を実体験し、また関係する史跡等を参観するところにある。2016 年度に続き、2 回目の参加となる。

### II 実習の形態の特徴

- 1 本研修は、姉妹校同士が一对一で行う形をとらず、開南大学が有する多数の日本の国公立の協定校から一校当たり 5 名前後の学生を募って実施する、いわばインターカレッジ型の研修である。本年度は、中国語コースに限っても、東京外国語大学、静岡大学、岡山大学、島根大学、徳島大学、尾道市立大学、園田学園女子大学等 16 校計 41 名（英語コースを合わせると 72 名）が参加し、本学部からは中国語コースに 3 名が参加した。こうした形態の海外語学研修・異文化研修は決して多くなく、研修生は、日本国内では中々企画できない貴重な経験を台湾の大学ですることになる。
- 2 語学の演習は 1.5 時間 × 20 回 = 30 時間。文化体験（半日）が計 3 回。研修旅行が日帰り 2 回、1 泊 2 日が 1 回。日本の協定校からは事前に学生の中国語能力・学修時間等について通知しており、研修生は、レベルを分けた 2 つのクラス（1 つは中国語学習 4 ヶ月程度も可。いま 1 つは、基礎を修了した者向け）いずれかに入って学習する。吉尾が見学した範囲だが、両クラスとも日本語は一切使わず、密度の濃さが印象的であった。学習成果は、数名のチームを作って参加するスピーチコンテストにおいて披露される。
- 3 研修期間中、大方午前は学内で語学の演習が行われる一方、午後の時間の 3 分の 2 以上が、学外の文化体験、旅行（宿泊）、および「自由時間」に充てられる。特に注目されるのは「自由時間」である。日本語を学ぶ大学院生がチューターとなり（本年度計 12 名）、授業中のサポートのみならず、この「自由活動」に随行する。具体的には、1 名のチューターが数名の日本人研修生を引率し、午後 1 時頃から夜宿舎に戻るまで学生の希望に沿って台北市内の参観等に同行する。チューターは事前に開南大学の教員から十分な指導を受け、また活動の現場でも綿密に連絡をとって引率する。日本人学生は所属大学の枠の越えてこの研修に参加するだけに、チューターのリーダーシップは目を見張るものがある。逆に研修生は、かかるチューターの姿を通して台湾の大学を実感し、大学間国際交流の意義等を理解する。

4 実習の経費は渡航費、日当・宿泊費合わせて12万円前後（小遣い等を除く）であった。

### Ⅲ 参加学生の感想

参加した学生の一人、国際社会コース（当時2回生）伊藤美沙希の感想文を掲載する。

・・

開南大学夏期研修について

B161G018P 伊藤美沙希

私は1年生の頃から中国語の授業を受講しており、中国語圏の文化に興味があった。実際に中国語を使う環境での生活を体験してみたい、現地の中国語の先生から中国語による授業を受けてみたい、台湾の文化について知りたいと思い参加させて頂いた。

中国語の授業に関しては、初めて中国語のみで行われる授業を体験し、初めは殆ど聞き取れず焦りを感じたが、30時間の授業を終える頃には大体の意味は把握できるようになっていたように感じた。中国語で一人ずつ発表をする機会もあった。

授業以外では、台湾の有名な観光地、歴史のある場所などに連れて行って頂いたり台湾の文化体験もさせて頂いた。また、町で買い物をしたりタクシーに乗ったりする際などに実際に中国語を用いて台湾の方の会話をする機会もあり、これまで学習していた中国語を実践的に使うことができた。学生チューターにはとても親切にして頂き、町で出会う台湾人もとても親切で初対面でも距離が近かった。

開南大学でのこれらの経験を通して、中国語学習に対する意欲が向上し中国語のみを使う環境に身を置いてより実践的に学びたいと感じた。また、町で台湾人と関わったり台湾の生活スタイルに触れたりしてより台湾の文化について調べ、日本文化との関わりなどについて知りたいと思うようになり、半年間の開南大学への留学に挑戦することを決めた。この機会を無駄にしないよう積極的に行動していきたいと考えている。

### Ⅳ 本研修参加の成果と「海外実習」の中での位置づけ

上記の伊藤美沙希は今年度開南大学に正規に留学する予定であるが、実は、一昨年この研修に参加した学生も、本年2月に台湾の別の大学に留学した。即ち、開南大学で毎年夏季に実施されるこの外国語・異文化研修は、本学人文社会科学部の「海外実習」において、学生が段階的に学習しスキルアップを図っていく材料を豊富に提供できる、入門的授業の1つではないかと考える。



## プログラム（参考）

○食事付き

	09:00-10:30 10:40-12:10	13:00-14:30 14:40-16:10	備 考	朝食	昼食	夕食
0817 TH	到着	開会式・歓迎会 / 中国語 / 英語①②	タクシー 空港→大学学生寮		○	
0818 FR	中国語 / 英語③④	文化体験 1 陶芸絵付け体験	専用バス 大学—鶯歌老街		○	
0819 SA	中国語 / 英語⑤⑥	自由時間（台湾人学生との交流等）				
0820 SU	中国語 / 英語⑦⑧	自由時間（台湾人学生との交流等）				
0821 MO	台北 101 → 四四南村 → 鼎泰豊（昼食） → 故宮博物館		専用バス 大学—台北市内		○	
0822 TU	九份老街 → 海悦樓（昼食） → 十分老街 → 天燈上げ体験		専用バス 大学—九份・十分		○	
0823 WE	中国語 / 英語⑨⑩	文化体験 2 参拝・縁結び祈願体験	専用バス 大学—霞海城隍廟・西門町		○	
0824 TH	旅行 3（1泊2日） 開南大学 大甲鎮瀾宮・老街 香蕉新樂園 微熱山丘 南投本店 日月潭哲園ホテル				○	○
0825 FR	日月潭哲園ホテル → 日月潭観光 日月老茶廠 廣興紙寮・紙すき体験 開南大学			○	○	
0826 SA	中国語 / 英語⑪⑫	文化体験 3 パイナップルケーキ作り体験	専用バス 大学—郭元益鳳梨酥・大溪老街		○	
0827 SU	中国語 / 英語⑬⑭	自由時間（台湾人学生との交流等）				
0828 MO	中国語 / 英語⑮⑯	発表準備				
0829 TU	中国語 / 英語⑰⑱	中国語 / 英語⑲⑳ 成果発表 / 修了式	帰国準備		○	
0830 WE	帰国	帰国	タクシー 大学 → 空港			



(開 会 式)



(学外／文化体験 1)



(学外／文化体験 2 ・宗教文化)



(修 了 式)

**English Immersion Study Tour**  
**Sun Pacific Collage, Cairns, Australia**  
**20th August to 16th September 2017**

---



**By Howard Doyle (tour coordinator)**

**including reports by participating students,  
Akari Hiyama, Kaena Kawamura and Takumi Ide**

## Executive Summary

In August-September 2017 a 29-day Study Tour group of 7 students from Kochi University's International Studies Course (KU) went to Sun Pacific College (SPC) to study and practice English. The purpose of the was to immerse students into an English-only environment in which orthodox communicative-style teaching and active participatory learning in classrooms would be complemented by the English-only interactive environment in SPC. According to student feedback and coordinator's (Howard Doyle's) observations, this was quite successful.

From the start, students individually experienced and took responsibility for their own trip preparation, from passports, to paying SPC, to arranging flights and banking arrangements. This approach was taken in part to accustom students to individual responsibility and choice rather than dependence on teachers and travel agents. One outcome was no problem from stressors like culture shock or misadventure. In fact, students spent most of their time on the SPC campus in the healthy social community life there with activities, meals, staying in dormitories, going out shopping to Smithfield or to Cairns City Centre for shopping and tours sometimes.

All students took weekly tests within the scope of SPC's Cutting Edge materials-based curriculum based on Council of Europe Language Framework of Reference for Languages (CEFR) and in the Week 3 progress test in which they all achieved promotion one class higher (mostly 'Intermediate' around CEFR Level B2). But a better gauge of success was students own self-assessment of increased confidence and competence with English. In Week 4 students all switched to homestay accommodation. Surprisingly all students reported preferring dormitories, even staying late and taking the buffet-style meals on the SPC campus while at homestay. This suggests favourable and preferable circumstances for them in the cheaper, more social on-campus accommodation. At the end of Week 4, all but one student reported being 'sad' to leave SPC, and all 'would recommend' this English Immersion Study Tour.

高知大学国際社会コースの学生7人は、2017年8月から9月にかけての29日間、オーストラリア、ケアンズ市のサンパシフィックカレッジ (SPC) でのスタディーツアーに参加しました。今回のスタディーツアーの目的は、英語のみの学習環境の中で、参加学生が積極的に英語を用いて学習することです。

スタディーツアーへの参加にあたり、学生は始めからほとんど自分でパスポートの準備、飛行機の手配やSPCへの支払いなどを行ないました。これは、今回のツアーのプログラムやケアンズのSPCでの学習に、主体的に取り組めるようにするためでした。その結果、ケアンズで4週間の間、問題は全然ありませんでした。実際、参加学生は、最初の3週間の間、SPCキャンパスにある宿舎（寮）に泊まり、毎食食堂を利用し、また、教室外でもいろいろな国の人々と会話をし交流するなど、多くの時間を英語だけで楽しく過ごしていました。

学生は毎週の金曜日にテストを受けていました。そして三週間目には、全員がレベルが1つ上のクラスである Council of Europe Language Framework of Reference for Languages (CEFR) の B2 レベルに上がることができました。しかし、何より大切なのは、学生自身が英語への自信や能力が上がったと自己評価していることです。

第四週には、SPC キャンパス内の宿舎（寮）からホームステイでの生活に変わりましたが、学生はSPC内のドーミトリーの方が良かったと言っていました。

4週間というスタディーツアーを終えケアンズから日本へ帰るときには、参加学生全員が「sad」と言い、そしてケアンズでのSPCの「English Immersion Study Tour」のプログラムを推薦すると言っていました。

# 1 Inspiration and Rationale

In the early 2010s, with the finish of extended English-study overseas programs to Australia there was no comparable program for Kochi University students. This was notwithstanding shorter study tours to Canada and Britain with intensive organization and programs in which students could experience and deal with local language and culture autonomously. Kochi University had several foreign exchange study programs in sister universities lasting up to a year in which only small numbers of students took part, and which cost and time were factors making these programs less attractive despite obvious academic and experiential benefits. Further, shorter study tours required students to stay together most of the time negating opportunities for individualised and uncontrolled experience in the destinations where these tours went. Regarding learning of English, top-down institutionalised programs provide quite limited opportunity for free exposure to, use of and chances to acquire English knowledge and skills that students would need to take with them as individuals after graduation.

At the same time, it is increasingly evident in educational and linguistic research that students from Japan would more likely interact using English with people from non-Anglophone cultures than from traditional home cultures of English (eg. the British Isles, North America and in Australasia, parts of Africa, South and South East Asia). These zones also tended to be more cost-prohibitive than other closer places where English was common, such as Malaysia or the Philippines. Nevertheless, prevailing attitudes in Japan (among parents, teachers and students) favour so-called English ‘native-speaker’ destinations.

Ideally a solution which could mix both circumstances was believed to be able to achieve a significant level of exposure to and required use of English could actually go the furthest in facilitating students learning of English. This proviso contributed to practical considerations:

- Cost
- Duration
- Appropriate English-language environment containing a formal structure plus scope for freer experience with English
- Welfare and security of participants.
- Accessibility from Japan

My own experience in language schools in Australia showed that cost, welfare and safety concerns negated such destinations’ educational value, in as far as students tended to stay many kilometres from the school and they tended to revert to own first language (L1) use in communities of people from the same home cultures as soon as five hours of lessons finished each day. However, unlike most other destinations, Australian English language schools had to be accredited with the local National ELICOS<sup>1</sup> Accreditation Scheme Limited (Australia) (NEAS) which went as far as having all courses meeting and articulating specific curriculum goals in content and delivery (NEAS Quality Assurance Framework 2014). Regular compliance checks ensured this. I began to search for an appropriate institution in

---

<sup>1</sup> ‘ELICOS’ refers to ‘English Language Intensive Courses for Overseas Students’, mainly just an acronym, it refers actually only to language schools connected to NEAS. There are approximately 220 such language schools, and about 15-20% are outside of Australia.

Australia.

Regarding destinations, ideally a direct flight link was preferable, the closest being Cairns approximately seven hours away, the most distant Melbourne 10 hours distant.

I started with university language centers, for instance at University of Queensland (UQ) in Brisbane (eight hours distant from Japan), the first Sister-University of Kochi University from 1980. It was large and tended towards English for academic purposes (EAP) for students intending to study there. Also as a large language center (hundreds of students), there was little regard for small study tour groups welfare-wise with students having to travel as individuals to homestay locations many kilometres distant from Day 1. Prohibitive accommodation and other costs (upwards of 50,000 yen per week) were another disadvantage. Other university language centers proved similar, including the small disinterested language center at James Cook University in Cairns.

## 2 Why Cairns? Why SPC?

Regardless of the in-built academic attraction of a nominally university language center, I looked for private-sector providers, of which there are 220 NEAS-accredited. Almost all had similar cost and welfare situations as university language centers, without the institutional name of a ‘university’. Some like Billy Blue English School in North Sydney had attached dormitory residences, which also were far and isolated from the schools’ campuses. Accommodation on campus seemed more advantageous, as would a close-by homestay option.

So, commencing in Cairns I found two potential colleges meeting safety and welfare concerns, Cairns College of English (CCE) in the business center of Cairns and Sun Pacific College in the northern suburbs near Kewarra and Trinity Beaches. The former had its own share-house accommodation at about 18,000 yen per week 15-minutes’ walk from campus. But security concerns were immediately apparent with no staff onsite and residents able to have strangers stay overnight. Students also had to provide their own meals. SPC on the other hand had shared-room dormitories onsite for about 22,000 yen per week, including all meals, staff present onsite 24 hours, organised free optional activities and classes during the week in lockable rooms with security boxes for students and a security entrance gate to the college. SPC appeared to go some way to meeting safety and welfare and also economy issues. Further, with almost all things that students needed in one place, it was the most convenient.

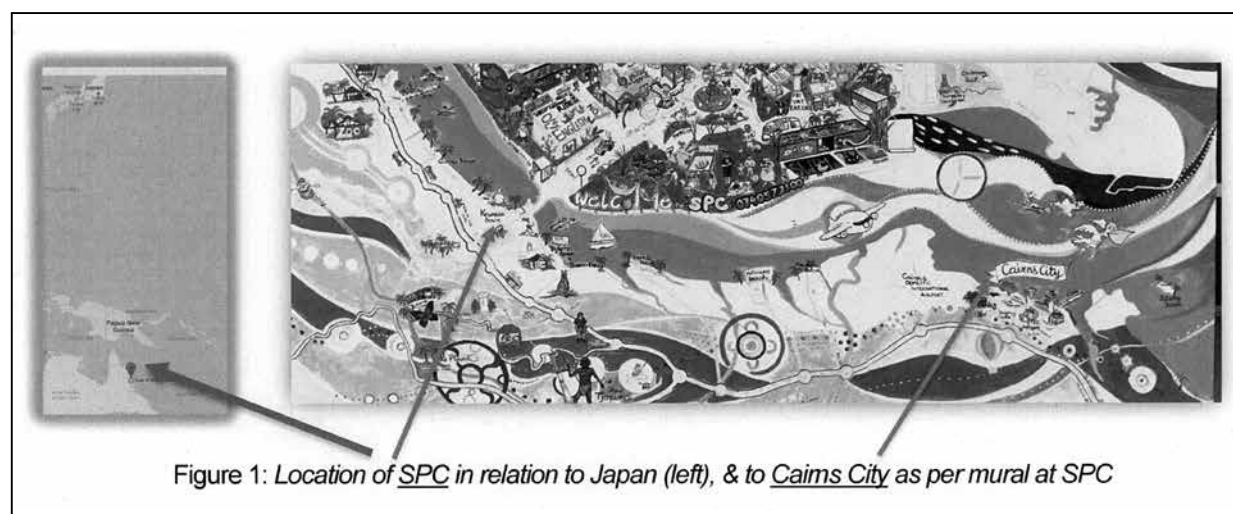
I continued to search institutions in Australia, with some regional country centers having similar features but had to be discounted due to accessibility time and cost. However only SPC seemed to pay holistic attention to students’ welfare combined with learning of English. Further, as it turned out, five other universities in Japan have sent student groups regularly to SPC<sup>2</sup>. As well, Cairns was found to be the most accessible location in Australia from Japan, time- and distance-wise.

---

<sup>2</sup> I was informed privately, but was asked not to disclose these universities’ names in my report, as SPC administration advise that they do not have permission to make these names public. However two Japanese university groups were at SPC while the KU students were there.

## Location

SPC is in the Northern Beaches area of Cairns in Far North Queensland on the northeast coast of Australia. There is an international airport about 20 minutes' drive from the college, about 7 hours direct flight from Osaka and Tokyo.



The college is close to two beaches (Kewarra and Trinity Beaches). Local public buses stop outside providing direct links with a large shopping mall at Smithfield and to the center of Cairns. There are two smaller shopping centers within 15 minutes' walk of SPC. Figure 1 shows a locational map and also a mural map of the local area on a wall in SPC itself.

## Initial Contacts

In late 2013 I sent inquiries to English colleges in Cairns and received replies from two, including SPC. In early 2014 I visited them, including a half day at SPC where I was shown lessons, lunch, accommodation and student orientation. This was an extensive introduction and on this basis I decided to pursue the goal of a study tour at SPC. The deciding factor was accommodation on-campus with attention to maintaining the English-only rule. The latter point I knew to be both an artificial and unnatural condition in Japanese contexts in the sense that normal communication including mediation of learning content, naturally incorporates Japanese language or mediation in Japanese meta-linguistic terms. Outside of Japan English-only is viable and frequent. However, at SPC there was attention to maintenance of English-only all the time. Further, with accommodation on campus there was a relative guarantee of security.

For two years there was no take-up at Kochi University until one student expressed interest to me. At the end of 2016 I assisted her organizing her trip to SPC in Cairns, which ultimately was successful for her. Coincidentally I found an opportunity to do a professional development session at SPC while the student was there and could then see first-hand a Kochi University student's experience. Eventually she also, thankfully, could give some advice to other students who became interested in the study tour.

During this time I liaised with Crissy Lee at SPC ([wecare@spcgroup.me](mailto:wecare@spcgroup.me)), who is marketing manager acting also as operations manager as required.

### **3 The English Immersion Study Tour:**

#### **Duration**

The English Immersion Study Tour extended 29 days, from departure from Kansai International Airport (KIX) to arrival back there, almost to the hour. During this time, effectively 28 days were ostensibly English-only extending from the time the group was met at Cairns International Airport (CIA) by SPC staff. Naturally at the start, use of Japanese at a Japanese airport was necessary. But this dissipated once on the Jetstar flight to Australia. Hence the English-immersion environment began as early as practicable to the very end when students maintained conversation in English like a hangover from their English as lingua franca period at SPC in Cairns.

#### **Timing**

Study Tour dates – 19 August to 16 September - were a consensus decision by students on advice. Factors included returning in time to prepare for 2<sup>nd</sup> semester, lower flight costs after the Obon season in early-mid August, and local weather in Cairns. The decision was appropriate given the decrease in shorter-term study tour groups from Week 2 and the consistent fine weather.

The option of spring vacation (February-March) was discussed. However itinerant rain, tropical heat and humidity in Cairns' wet season (similar to Kochi's July-September), and also the need to prepare for the academic year from April discounted this period in students' minds.

#### **Learning English at SPC**

Obviously the crucial consideration for selecting this study tour destination, SPC offered a satisfactory curriculum (quite comparable to any other NEAS-accredited language center), and a very satisfying English-learning environment. In short in terms of learning outcomes, SPC seemed to provide almost all of what was envisaged as necessary. Below, curriculum, teachers, lessons, assessment and supplements to lessons are described as well as the English to be learned, leading to a short discussion of desirable and hypothetical learning outcomes.

##### **• Curriculum, Syllabus, Teachers, Materials and Testing**

Across the General English courses, SPC uses Cutting Edge compendium of resources, a six-level course linked to the Common European Framework of Reference for Languages (CEFR) published by Pearson. The core materials are the Student's book, which contains 12 topic-focused modules engaging language forms (mostly grammatical), vocabulary, generic skills, pronunciation, communicative functions plus active wider topic- and text-based tasks. These correspond to the syllabus of each SPC course level. Though the basis is a generic British style of English, teachers in Far North Queensland logically adapted delivery to local cultural environment and English-language norms. Further, several teachers are of European and East Asian origins contributing to a less 'British', more non-descript English. This produces what some people would call World English. Instead though, it is really the broad-scoped form for a lingua franca English used in SPC. Materials are utilised through both print and digital media as well as various audiovisual content. This being said, there is not really any blended learning taking place in the sense that blended learning includes students using digital media autonomously (Doyle 2017a 2017b forthcoming). But there is out-of-class learning going on all the time, whether it is homework, or



students being immersed in their English-only environment

- **Student Notebook/Journal**

Supplementary materials include Cutting Edge Workbook tasks and each student's individualised SPC Notebook/Journal as primary. The students write in their Journal reflectively each day about a given topic or general reflections each day and hand it in to the teachers who read, mark and give comment feedback. Journals also contain daily surveys about welfare and concerns of students, enabling SPC to intervene quickly if a student's welfare, situation, physical or mental health becomes problematic. This real-world task done in English is advantageous for students' learning of English has a meaningful function. It is affective and natural in a situation like Cairns, however could not be so in a site where English is not lingua franca.

- **Progress Testing**

Each Friday Progress tests are done and at the end of each 12-week cycle block tests from the Cutting Edge package for each level are done to assess students' level for progress to other levels. The end of the third week of the current Study Tour coincided with the end of the SPC 12-week cycle. Following the progress testing, all seven students were promoted a level providing much gratification to all of them as well as some evidence of improvement in their English confidence and competence having taken place.

- **Out-of-Class Learning and the English-Only Rule.**

As well as the three meals eaten in common in the cafeteria, afternoons at SPC were taken up by optional supplementary classes, students doing homework (nominally 3 hours' worth per day) usually in groups, sports and other group activities or going out into the local community together and individually.

Given the international mix of students English was the natural language for interaction. If motivation to learn English was a carrot, the English-only rule was a kind of stick. It was enforced not only by staff but errant students' peers. Except for set-aside zones on SPC grounds, I cannot recall languages other than English being used in public at SPC, including in the Kewarra Beach surrounds. As study tour students later enthusiastically pointed out (see later attached student reports), the English-only rule and therefore English-only environment turned out to be a major factor.

The primacy of English is obviously part of the culture in SPC. Motivation for learning English would stem from its use in this context: extrinsically in order to obtain and maintain one's place in the SPC community; and intrinsically in as far as students' learning purpose was gratifyingly being met (Krashen 1981).

- **What English – or Englishes – are there?**

The only obvious proviso lies in the question of what English is being learned.

- standardised (British) textbook variety
- some local Australian English
- students' own and others' organic and natural English within the multilingual L2 English-only community in SPC

Especially in speaking, mistakes in language forms abound, but errors in communication occur far less. This is because in real life, appropriate communication of meaning is normally more urgent than having perfect English. Further, students must develop a stronger pragmatic sense regarding English. This is in order to say successfully what they wish to say and to grasp what is being said to them: by a mix of people who are better at English than a given student; also students who may have a different repertoire of English; or who simply have less English to use.

As an outcome this is not desirable in a purely scholarly or academic sense. However, it is phenomenologically normal in communication contexts featuring use of any language, not just English. Moreover, given the wide variety in English used across the world, KU students have had a chance to experience this; they normally would not have this experience if they remained in Kochi. In this sense, SPC becomes an ideal complement for what they get at KU:

#### • **Learning Outcomes**

Does this mean that students are not learning what they are being taught? That is complex and debatable which is acknowledged even by second language learning research heavyweights like Rod Ellis (1994). Obviously and naturally however, some of what they are being taught is not being used by students. Exceptions are words and expressions highlighted by teachers or noticed by students because they are easier to highlight or notice than syntax and phonology. Never the less, students' natural pragmatics sense is brought to bear: they pick up things after noticing other students' frequently using or trying to use various grammar, vocabulary and expressions, or they notice such forms used in other situations including in lessons. Another factor is that nonverbal communication and voice (control of pitch, pace, intonation and loudness) supplement language for communicability.

In sum, three factors produce an extended composite English-learning dynamic:

- combination of English taught in lessons backed up by English production tasks for homework
- the international and multi-lingual community and the English-only rule contributing to English as lingua franca situations, and
- subsequent eventuation of communication events in which pragmatic sense and strategic skills used through the medium of English supplemented by other communication modes

Further, students remain in the SPC environment and community for extended periods and so their own adapted language and communication behaviour becomes part of their normal behaviour for a while. An outcome of this is accelerated and expanded consciousness of English as communication tool. This can be seen from four aspects:

- increased competence for recourse to using English – they know what to say and write in a given situation.
- increased confidence in their own ability to do the same – they know that they can do it
- the English-form repertoire that they have picked up in lessons and outside of class in the first place
- accelerated and expanded consciousness of English as communication tool

This fairly holistic English-learning dynamic at SPC in Cairns is something that is all but unattainable for students while at Kochi University where the field for using English is far more limited.

## 4 Plan Development

Following my visit to SPC in March 2014, there was no take-up at Kochi University of SPC in Cairns as a destination for current students to experience learning and using English in another culture, though I did hear of and meet students who had gone there independently after graduation. Yet, in late November 2016 one of my own seminar students expressed interest. I advised and assisted her with bookings and arrangements and eventually she went to SPC for 4 weeks in February-March 2017. Her trip was private, unsanctioned by Kochi University, however her feedback both to me and among her peers was positive.

Further, while this student was at SPC I also was able to go there to present a professional development session (on the viability of MOOCs to assist learning of English. See Doyle 2017a). At the same time I had an opportunity to talk to my student while there, to be re-acquainted and shown around the SPC campus to see changes and enhancements of facilities. Preliminary discussions and arrangements were made then for organizing a program for students of Kochi University to go to SPC as a group sanctioned by KU or privately-organized. On this I began to liaise regularly with Crissy Lee, Marketing Manager at SPC

From the start such a study tour was considered as a holistic experience, commencing from students initially expressing interest, to organizing bookings and travel preparations individually, getting to and from Cairns and SPC which naturally was to be done together as a group. Moreover, on a group basis the initial cost of 3,590 Australian dollars (A\$) was reduced by 10% to A\$3,260 (see cost breakdown in terms of Japanese yen below). As well, the packaging together of dormitory accommodation and all meals in the first 3 weeks enhanced the economic advantage. It was also found that a week homestay accommodation could be afforded, so it was included in the plan.

In conclusion, students were required to act on booking and organizing things themselves and to provide receipts and documentation for me as coordinator for record-keeping purposes. To assist students, meetings were called in May, June and July to demonstrate different ways to purchase air tickets online, send foreign currency payments to SPC through the post office, Australian electronic visa and where necessary Japanese passport application processes. At the same time met and could advise individual students to keep track of their progress and timing of their preparations.

### **Costs, Paying and Student Involvement**

Shifting preparation responsibilities onto students was intended to have an educational outcome. This is exemplified by several students increasing their financial literacy awareness by having to deal with debit and credit cards to enable online purchase of Jetstar air tickets. To do this, students needed a debit card or credit card. As three students were younger than 20 years old, they needed to apply either for a bank debit card or credit card extension from other family members' cards. Students were also advised about more infrequent use of cash in Australia compared to Japan. Eventually all students purchased air tickets online using debit cards except one who took the more expensive option of using the travel agent HIS and paying cash.

The credit/debit card issue is highlighted to demonstrate how immersion in and engaging with other ways of doing things that are common outside of Japan transcends mere language and cultural expectations. Further, in the end enabling goals comes down to individual experience and responsibility.

Costings were worked out with the aim of keeping the outlay under 400,000 yen. Final proposed costings are presented below in Table 1, including students' spending money estimate

SPC tuition, all meals and accommodation	290,600 円 (or 3,260 Australian dollars)
Approximate spending money	50,000 円
Air fare (depending on time of year)	69,000 円
Buses to & from airports	15,000 円
Travel Insurance	15,000 円
Provisional TOTAL	<b>439,000 円</b>

Notes: *(Airfare cost tentative on basis of booking made on 6 June 2107 for 20 August departure on Jetstar; SPC fees are to be paid in Australian dollars, so calculations are made on the basis of the yen-A\$ exchange rate on 12 June 2017, A\$1= 89.00 Japanese Yen; 'Provisional' total, in as far as currency exchange rates change and also airfare prices change depending on time of booking)*

Table 1: *Proposed costings for the English Immersion Study Tour to SPC Cairns*

### **Action & Preparation for departure**

Once costing had been worked out, a flyer was produced in cooperation with in liaison with Crissy Lee and other SPC staff. It is shown in Figure 2. The flyer was distributed to students in my classes and seminars and posted on the International Studies Course noticeboard and outside my office.

By the end of May 2017, seven students from the International Studies Course (6 Year-2 students and one from Year 4) had inquired and put names down. Bi-weekly and later weekly meetings at Friday lunchtimes were held. However these rarely were fully attended. A minority of students required extensive individualised email contact to make sure they were up to date.



**SPC Cairns**  
English Language School

## English Immersion Study Tour

### WHY CAIRNS?

Cairns is a popular place to visit, but it's also home to about 160,000 people who enjoy coastal living at its best. With wonderful World Heritage Listed playgrounds close by, quiet streets, fantastic tropical weather, warm waters and relaxed lifestyle it really isn't too hard to guess why people come here on holidays and then end up staying for life.

POPULATION	CLIMATE	LIFESTYLE
<input checked="" type="checkbox"/> 160,000 people	<input checked="" type="checkbox"/> Tropical winter: 25 C	<input checked="" type="checkbox"/> Relaxed
	<input checked="" type="checkbox"/> Tropical summer: 32 C	<input checked="" type="checkbox"/> Local environment

PUBLIC TRANSPORT	MAIN ATTRACTIONS	CAMPUS LOCATION
<input checked="" type="checkbox"/> Bus	<input checked="" type="checkbox"/> Great Barrier Reef	<input checked="" type="checkbox"/> Walk to the beach
<input checked="" type="checkbox"/> Taxi	<input checked="" type="checkbox"/> Rainforest	<input checked="" type="checkbox"/> Quiet neighbourhood
<input checked="" type="checkbox"/> Uber	<input checked="" type="checkbox"/> Tropical Beaches	<input checked="" type="checkbox"/> Tropical wonderland



Sports activities



25m Swimming Pool

### WHY SPC?

- ☒ Strict English Only Campus
- ☒ On-site dormitory with all meals included
- ☒ Facilities for sports and recreation
- ☒ Daily activities and workshops to make more friends
- ☒ Walking distance to our beautiful Kewarra Beach
- ☒ FREE evening classes for dormitory students
- ☒ On-campus support and 24/7 emergency contact



On-campus Dormitory

#### Intensive General English Course

- ☒ 20 hours per week
- ☒ 5 hours of optional classes
- ☒ From Elementary to Advanced

#### Support for studies

- Extracurricular reading material
- SPC Journal
- After class consultation hours
- Evening class

8:30am - 10am	Core 1
10am - 10:15am	Break
10:15am - 11:45am	Core 2
11:45am - 12pm	Break
12pm - 1pm	Core 3
1pm - 2pm	Lunch Break
2pm - 3pm	Optional Classes
3:10pm - 4pm	Consultation hour

### English Immersion Study Tour

4 weeks of Intensive General English

3 weeks of on-campus accommodation (including 3 meals per day)

1 week of homestay (including meals)

**A\$3260 (@A\$1=90yen => 293,400 円 \*)**

(\* As of 12 June 2017.)

[+ airfare ( 6万ー 1 1 万円 ), insurance and spending money]



Figure 2: Study Tour Flyer

One outcome was that as coordinator I was able to make sure of each student's preparation progress on an individual basis. However, it was hard to have a study tour group-consciousness evolve. To an extent this was maintained all through to the end of the study tour. Instead, students gravitated towards one friend in particular before and during the study tour. In this way at least students could have a measure of peer-cooperation dynamic assisting whole-group cohesiveness.

In June 2017 costing, proposed schedule and description of the English Immersion Study Tour to SPC, Cairns were submitted to the Kochi University International Studies Course Overseas Study and Exchange Committee (高知大学人文社会コース留学・実習委員会), and was sanctioned as an official study tour in July. This was significant for two reasons:

- the study tour became the equivalent of a university course for which students could get academic credits;
- it enabled proper university support and representation for purposes of running the study tour, including some funds for me to accompany the students to SPC and Cairns

Meanwhile, students were preparing for their trips, and some space needs to be spent describing this as preparation for the study tour was part of the overall learning process. Chronologically, it followed this sequence:

- **Passports** – as of 1 June 2017, 3 out of 7 students needed passports, which were all applied for and obtained by them within a month
- **Visas** – as Japanese passport holders, all students required electronic visas (eVisitor) for Australia, which could be applied for online with from the Visa section of the Australian Department of Immigration and Border Protection (<https://www.eta.immi.gov.au/ETAS3/etas>). An application can be made for a fee of A\$20 (approximately 1,800 yen) with a valid passport outside of Australia, in a process that takes less than 24 hours. However, only selected credit/debit cards can be used for the electronic payment. Further, several immigration agents mask their own websites as the Australian government one charging more and taking more time. While three who had passports and who had VISA or Mastercard credit or debit cards, obtaining visas was troublesome and ultimately time-consuming for four out of seven students. One of them eventually organized and paid the travel agent HIS to do it for her, while another utilized her parent's card. The remaining two applied for their own cards and eventually could obtain visas, one through the official Australian government website and the other through a separate agent for 3,000 yen.
- **Arrangements for money for travel** – as experienced when obtaining visas, students soon understood the financial practice of cashless transactions common online but less common in Japan. While three students had had experience with their own credit or debit cards, four had not and were required to obtain them. I went to the local Post Office Bank ('*Yuuchou*') seeking advice and instructions to pass on to students, eventually taken up by one of them. Two of these students were over 20 years of age, and so were able to apply for cards in their own right. The other two being still 19 had to use their parents as proxies to get extensions from their parents' cards.

For one student (who eventually went to HIS) after numerous points advice and counselling this process took about two months, over twice as long as others. I put the delay down to resistance to affording things in new or unfamiliar ways despite there being no similar or economic alternative.

- **Air tickets** – originally it was planned to use Cathay Pacific to fly to Cairns, but when time came to make bookings, Cathay Pacific had become more expensive and booked out. The direct route from KIX to Cairns on Jetstar was substituted. Jetstar bookings were as for low cost airlines, namely two one-way flights instead of more standard single return flights. To book Jetstar online required two flight transactions and one monetary transaction which could only be done electronically using debit/credit cards. In June, two meetings were held to demonstrate the complex process for booking on Jetstar including choice of seat, meal and check-in luggage allowance, stopping at the point for making the card payment. English-language online interface was used for this. This highlighted for students the consistent need for credit/debit cards, in order to ease the preparation and payment process using cards. All but the student who booked through HIS eventually were able to make bookings (though one neglected to select check-in luggage – see later) by mid-July without problems. All used the Japanese-language online interface.
- **Paying SPC** – though the option for electronic payment of fees to SPC existed, limits of students payment amounts with their cards and scant hard-copy payment documentation led to choice of money transfer at the Post Office. As well, I was able to visit and brief post office staff that students would be coming to pay and receive transfer form templates. I did this in June, though students eventually paid in July. One student went alone to pay and following that they paid in groups of two (one pair making a one double payment).

At the point of money transfer, students had to have approximately 293,000 yen in cash each to hand over to the post office staff who would then action the exchange transaction into the fixed cost amount, A\$3260. Students had to witness and process this first hand as well as fill out money transfer forms including Australian bank and branch data plus other information for tracking payments. This effectively was their first interactive experience interacting directly with an institution in Australia, as well as of processing a complex transaction firsthand.

In the process, students had to 1. fill out, initial and sign their printed enrolment form; 2. I would scan and send it to SPC; 3. students would be sent a Letter-of-Offer including a student number to be used for record-keeping, and forward it to me for general record-keeping; 4. students would transfer money filling out transfer forms in English and citing their SPC student numbers recorded on their letters-of-offer; 5. students would sign a printout of their letter-of-offer and I would scan and send it to SPC; 6. SPC would send a payment receipt to students who would forward it to me for my general record keeping; 7. liaising with SPC I would confirm that money transfers had been received and students' courses and accommodation were booked.

Though relatively complex, with a relatively small number of students it was little trouble to keep track of payment progress and be able to account for each student. However, if students had numbered 10 or more, SPC said they would process them all in one transaction as a designated study tour.

Regarding my record-keeping, I kept electronic copies of each student's SPC documents: 3 initialled pages and one filled-out page of the SPC enrolment forms; money transfer forms from the Post Office; Letters-of-Offer; students' Confirmations of Enrolment (response letters they sent accepting the enrolment) from SPC. On two later occasions I had to re-forward copies of documents to SPC to confirm payments and other details. Students also received confirmation emails from SPC (and from Jetstar, and also the Australian Department of Immigration and Border Protection regarding their visas)

for the purposes of their study tour. In the end, this served as useful record-maintenance of documents in English and in Japanese for students.

- **Travel Insurance** – usually neglected, travel insurance was emphasised as the thing to rescue students after any accidents in a place where they know nothing and nobody. Eventually nothing did happen, but the point was to manage and help them to manage and learn about risk.

As an officially sanctioned study tour, students were eligible for a plan by J I Accident and Fire Insurance (ジェイアイ傷害火災保険株式会社) sponsored by the Kochi University Center for International Collaboration (国際連携推進センタ). Application forms were provided to students for the option to choose themselves the university plan if they wished. Costing 12,660 yen for 31 days, this was economical, with the extra advantage of being administered by the university. 5 out of 7 students opted for it, the other two selecting insurance plans though HIS and Sompo Japan. As an essential part of overseas travel preparation, students did have to consider the issue, which I continually emphasised. However fortuitously no accidents happened.

- **Meeting at KIX** – four of the 7 students were coming from outside of Kochi Prefecture, 3 from inside. A flexible time to meet was agreed at between 4 and 6 pm on Saturday 19<sup>th</sup> August near a Travel Insurance sales counter in the Departures area.

## The Tour

A timeline for the actual tour is shown below in Table 2.

English-language version	Japanese-language version
19 <sup>th</sup> August 1600-1800 pm met at Kansai International Airport (KIX)	8月19日 PM1800 関西国際空港で
2100pm depart for Cairns on Jetstar flight JQ16	PM21:00 JETSTAR(JQ16)でケアンズへ出発
20 <sup>th</sup> 0500am arrive Cairns International Airport	20日 AM05:15 ケアンズ到着 サンパシフィックカレッジ[SPC]のスタッフとバスで SPCへ;
After immigration and customs met by SPC staff	オリエンテーション; 朝食やフリータイム
Bus to SP, campus orientation, breakfast processing and dormitory room allocation	21日 プレースメントテスト
21 <sup>st</sup> Placement Test	22日 授業
22 <sup>nd</sup> Lessons	23日 授業
23 <sup>rd</sup> Lessons	24日 授業
24 <sup>th</sup> Lessons	25日 授業
25 <sup>th</sup> Lessons	26日 アクティビティとフリータイム
26 <sup>h</sup> Organized activities & freetime	27日 アクティビティとフリータイム
27 <sup>th</sup> Organized activities & freetime	28日 授業
28 <sup>th</sup> Lessons	29日 授業
29 <sup>th</sup> Lessons	30日 授業
30 <sup>th</sup> Lessons	31日 授業
31 <sup>st</sup> Lessons	9月1日 授業
1 <sup>st</sup> Lessons	2日 アクティビティとフリータイム
2 <sup>nd</sup> Organized activities & freetime	3日 アクティビティとフリータイム
	4日 授業



3 <sup>rd</sup> Organized activities & freetime	5 日 授業
4 <sup>th</sup> Lessons	6 日 授業
5 <sup>th</sup> Lessons	7 日 授業
6 <sup>th</sup> Lessons	8 日 授業
7 <sup>th</sup> Lessons	9 日 アクティビティとフリータイム； ホーム ステイ開始
8 <sup>th</sup> Lessons & Block progress test	10 日 アクティビティとフリータイム
9 <sup>th</sup> Change accommodation from Dormitores to Homestay	11 日 授業
Organized activities & freetime	12 日 授業
10 <sup>th</sup> SPC Ironman Race, bbq & freetime	13 日 授業
11 <sup>th</sup> Lessons	14 日 授業
12 <sup>th</sup> Lessons	15 日 授業； 修了式
13 <sup>th</sup> Lessons	16 日 帰国日：AM09：30 SPC に集合 バスで ケアンズ空港へ JETSTAR(JQ15) PM13：00 ケアンズ空港出発 PM19：30 関西国際空港到着 高知駅へ
14 <sup>th</sup> Lessons	
15 <sup>th</sup> Lessons & graduation	
16 <sup>th</sup> 0930am Meet at SP, bus to Cairns International Airport, check-in. 1300pm depart Cairns for KIX 1900pm arrive KIX. Students retur	

Table 2: *English Immersion Study Tour Schedule*

## 5 Trip & Arrival

After meeting at KIX before 6 pm, we checked in luggage without incident except one student who had neglected to include check-in luggage with her booking. After re-packing and re-distributing some of her effects to minimize weight, eventually she had to pay 8,000 yen. We then all passed through immigration, security checks, and later boarded without incident. The 9 pm scheduled departure was delayed until 9:55 pm, however we were able to reach our destination, Cairns International Airport by 5:30 in the morning.

After students' first experience with electronic passport processing at Immigration control, we collected suitcases and emerged outside to be met by SPC staff member, Yuka. After waiting for some other people for SPC to come through (see picture), we were driven the 25 kilometers north to the SPC campus and breakfast.



Figure3: *Students just arrived at Cairns*

## Orientation & Placement

Yuka, Maki and other staff processed and photographed students for campus identification cards and students were taken to dormitory rooms. After the flight they slept most of Sunday.

On Monday after breakfast placement testing took place, supervised by Assistant Director of Studies (ADOS), Janus (see Figure 4). This was based on the core resource materials at SPC, Cutting Edge published by Pearson, with listening, reading, and writing



Figure4: *ADOS, Janus, conducting Placement*

components. As a placement test, components start with low level tasks rising in level of difficulty until a cut-off point is reached by the test-taker, who is then allocated to a correlating level class ([www.venture books.cz](http://www.venturebooks.cz)). This reflects a General English curriculum based around these course materials reflecting bands defined by the Council of Europe Framework of Reference for Languages (CEFR):

- Starter (A1)
- Elementary (A2),
- Pre-Intermediate (B1) – 4 KU students in two different classes
- Intermediate (B2) - 2 KU students
- Upper-Intermediate (C1) – 1 KU student
- Advanced (C2+)

Kochi University students were tested with twenty other students starting concurrently. Of the seven students, four were placed in separate Pre-Intermediate classes, two in Intermediate and one in Upper Intermediate.

Later on Monday, students received more detailed orientation to the SPC campus, the Kewarra Beach and Cairns areas. Delivery was done by different teaching and administration staff in coherent, simplified English, in which the English-only rule was once more emphasised.

## SPC Notebook-Diary

As well the all-important SPC diary-notebook (described and discussed before. See Figures 5 and 6) was explained. This was for students' reflective use of English while studying at SPC. It served both a homework and welfare-monitoring function. It worked by students writing in English as in a diary or for a specified homework writing task. There also is a brief survey about feelings and opinions, condition of accommodation, food, facilities and soliciting of any expression regarding a malady or problem. Also on a score out of 4, students rank on a star-graph their

- A – Grammar and Writing

- B – Health and Exercise
- C – English Conversation
- D – Reading and Vocabulary
- E – Daily Life

These are seen and feedback provided by teachers on a qualitative basis as well as advice regarding language use, errors and so on. If any issue or problem is apparent, staff responsible for academic or welfare sides of the SPC experience are notified and act on the issue by mid-morning break or lunch-time.



Figure5: The SPC Notebook/Journal

Students then relaxed, did Zumba dance, went for walks or slept as the afternoon's activity before first lessons on from Tuesday

### Week 1

The KU students had arrived at SPC at the start of the ninth week of their 12-week cycle. At the end of the 12<sup>th</sup> week (ie. end of Week 3 for the KU students) there would be a Progress Test for all students affecting promotion to higher classes – and a higher level on the CEFR. Until then there were optional weekly tests for students to take. Therefore it was most likely that students were set in their classes at least until the end of the SPC course cycle.

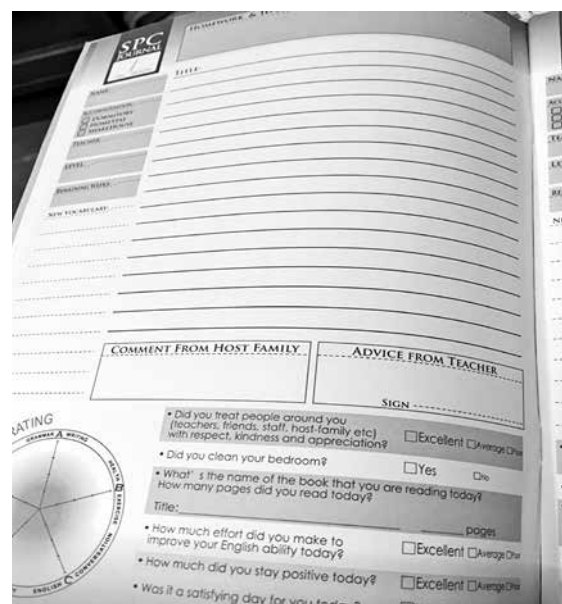


Figure6: An Entry-Page from the Notebook/Journal

All students woke early for breakfast and attended class punctually. One issue eventuated with the student in the Upper-Intermediate class being apprehensive about level, especially regarding faster-speaking therefore more fluent-sounding students from Europe and South America. After some discussion with me and counsel from Director of Studies (DOS), Vicky, and ADOS, Janus, she persevered for the rest of the week. This was the only issue in the whole 4-week study tour.

### Exploring the Surrounds

The flow of one day was similar to the next (a normal routine day is described later). During Week 1 I made a point of taking mixed groups of KU students to Kewarra Beach or Trinity Beach including early mornings and evenings to see sunrises and full moons over the Coral Sea (see picture). As well, I went with them to Smithfield, the nearby large shopping mall, and smaller more local shopping centers as well.

As well the Cairns Festival was held from 25th August to 3<sup>rd</sup> September (during Week 1 and 2). All students went to see live concerts, fireworks and other events on and around the Esplanade travelling

by public transport the 25 kilometers to town on their own. Various accounts of their experiences were heard (see students' own reports later in Appendices) and everyone returned safe and satisfied.

### Smaller-Group as Opposed to the Larger-Group Dynamic



As students had come on the tour as pairs of friends initially rather than a unitary group, actually they were able to experience local community, culture and language more autonomously than if they had done everything as a large group. For the whole four weeks, KU students tended to do things in groups of two or three. This seems to have had an unplanned stronger impact on their inter-cultural and language learning in as far as they had had to deal with things in their own way with their own resources than would be possible in a group relying on a coordinator/guide. This includes measured risk-taking, and the confidence that instils following success. This self-directedness dynamic did operate however with available

back-up by myself as coordinator and SPC staff if it were needed. Thankfully it wasn't.

### Weeks 2-3

Following end-of-week tests in Week 1, 5 KU students remained in the same classes. However, a number of Upper Intermediate students had graduated the previous week, so some higher-level Intermediates and remaining Upper-Intermediates formed a combined class in Week 2 including the other two KU students.

### Lessons

Lessons were in three blocks totalling 4 hours daily running from Monday to Friday totalling 20 hours

Core class 1:	8:30-10:00
Break:	10:00-10:15
Core class 2:	10:15-11:45
Break:	11:15-12:00
Core class 3:	12:00-13:00
Lunch:	13:20-14:00

compulsory morning classes five optional hour-long afternoon classes each day (which could be support lessons by individual teachers, TOEIC or other test preparation or specific purposes such as job-application skills or other purposes). These are shown in Table 3. In all there were at least 24 hours of lessons each week – an extra hour taken up with weekly graduation ceremonies. Yet, as students were on campus generally 24 hours per

day, the mandatory 25 hours for all NEAS-accredited language centers (such as SPC) was often an illusory limit, especially given the English-only rule at the college.

## Significance of NEAS Accreditation

NEAS accreditation needs to be clarified in the context of Australian education under the Australian Qualifications Framework (AQF) regime. As mentioned earlier, all NEAS-accredited English schools need to comply with standards set by NEAS (NEAS Quality Assurance Framework 2014). This means that there are more similarities than differences all NEAS-accredited schools' programs in principle. This quality extends from professional certification of teachers to dimensions of classes and classrooms to communicative styles of teaching and self-directed learning. Language centers are audited for compliance every three years. In other words, all language centers in universities and outside of universities offer ostensibly the same programs. The only difference is the range of programs that different centers run (eg. general English, test preparation, English for specific purposes, vocational and literacy programs).

For study groups from KU requiring active learning in general English programs, basically any NEAS-accredited language center would offer the same as another. What KU needs to consider is what else can students gain or learn from their study tour, more specifically from the institution where they go.

## Classes

Classes had between 10 and 15 students, though up to 18 is permitted in NEAS-accredited schools like SPC in Australia. The rooms were in two rows in a long building in the north east of the Campus with a wide open space between them (see Figure 7) with academic staff offices at one end. This open space was comfortably attired with benches and tables for students. In this space weekly graduation ceremonies were held (see Graduation below).



Figure7: The Classroom Precinct as seen from the Teachers' Area

Teachers took students out of class into the SPC gardens where various gazebos, sports areas and fruit groves provided very pleasant learning spaces. Each classroom was e-learning equipped with ample space for active learning and groupwork.

In the evenings there was a further option of guided practice in mixed level talking or discussion sometimes mixed with games. There was also the SPC Resources Center for autonomous learning, which appeared used less than expected. This was partly due to homework tasks assigned during lessons – students would spend their time on teacher-fed activities with less time and scope for managing their own consciously autonomous learning.

## Homework

Not really 'home'-work as such, more like self-completed out-of-class tasks done on campus. Students

in the core morning classes generally had lesson-based homework supplementing or complimenting their notebook-diaries. Generally, language-function focussed tasks and often just materials drawn from the Cutting Edge workbook texts. These seem non-communicative but the communal environment at SPC denuded that aspect, as students tended frequently to do homework interacting in groups. In other words, homework was a group-interactive activity, and doing it was a public experience.

### **English, the English-Only Rule and the Local Language Community**

In some ways this defines the culture inside SPC, English-as-lingua franca from the top down. Presented explicitly to students at the start (or before they arrive) this defines their interactive starting point. Punishments are handed out, including and up to expulsion from the college. Reminder-signs, such as Figure 8, were common around the campus. I ever only heard only one administration staff member ask one pair jokingly where their



Figure8: An English-Only Rule Sign at SPC

English had gone though. Yet, I almost never heard any extended conversation in other language besides English, even from KU students! Instead frequently errant students were told by their peers things like, ‘Hey, speak English’. And this was not always from people with a different L1. This supports the Director of Studies (DOS), Vicky Shaw-Yates’, claim that the rule had a bottom-up effect as well.

Indeed, SPC struck me as a multicultural community separated from largely English mono-lingual Kewarra Beach. Yes, in both domains, English is maintained, however arguably there are two (or more) different, or separate, kinds of Englishes<sup>3</sup>. SPC community members (ie. students, staff and others) have the common interest of maintaining and sustaining English there. And newcomers learn this way and promote it the longer they are there - like in a classic Community of Practice (Lave & Wenger 1991). It is also part of the philosophy of SPC founder and director, Taka Kasahara, to have use of English pervade the environment as a common-sense learning dynamic. It is effective as English becomes the custom, the cultural norm.

Staying at SPC with students over four weeks I could see that this condition, the normality of English use, was achieved in all KU students’ daily behaviour. This condition is unachievable except in occasional micro-cultures in Kochi. The environment in KU sees English as target knowledge while Japanese language remains normal in interactive behaviour.

---

<sup>3</sup> This does not mean that people use one type of English all the time – of course not. People might move from one type or style of English to another as they, say, move inside and outside of the SPC security gate being able to do both. Rather, the different or separate types of English are evident in if, say, what people speak inside and outside were written down and could be seen as transcripts or heard in recordings.

Coming from somewhere else (Japan, Kochi University, or just from outside) to SPC and striking English like this, one time I wondered what they presumed English to be at SPC. The easy answer is that English is what is taught and what people are only to use. While discussing this with the DOS, Vicky, I suggested that English was the stuff in the SPC syllabuses, lessons and textbooks on one hand; on the other it was also what was left after people at SPC rejected what they thought was not English when it came time to use English. In other words English was the goal and also something defining the SPC culture and community, though not the only thing.

### **Englishes at SPC and Other Places KU Students Go**

English as a goal was just not as important in Japan, at Kochi University, nor even just outside the front security gate of SPC. One reason is that in the following three other zones where students would go, communication is facilitated by noticeable types of English language:

- At KU, a focus on form from an academic and test-taking perspective
- In Japan, a fluent Americanised variety on one hand, a more common Japanese variety on the other and even *wasei eigo* which features within Japanese on another
- In mainstream Australian culture (eg. just outside the SPC front gate) naturalised Australian communication norms (eg. including more strongly Australian-style English).

Mentioning communication, one other point must be emphasised regarding the SPC English zone: people in that community are a multilingual mix – almost everybody comes to English as a second or other language. This means that they are accustomed to having to communicate linguistically in more than one way. This point contrasts with monolingual English native-speakerism elsewhere. To elaborate, students and staff are accustomed to mediating and modulating language for interpersonal communication, whether for accommodating interlocutors or for making the message coherent. This point draws in observations and hypotheses mentioned in research literature, such as Vivian Cook's (2012) Multicompetence model: that people with more than one language psychologically have multiple ways of processing and conveying meaning (his 'multicompetence'); and Jennifer Jenkins (2017, Jenkins & Leung 2017) who notes underdeveloped accommodation and mediation skills of English-dependent monolingual British people in a post-Brexit age.

In other words, students at SPC do get English and they get something much more significant: extensive experience using communication skills for talking to various people of different language backgrounds and English levels in a community that more closely resembles people they are likely to use English with in their future careers and lives. That foundation is more important than all the English in the world.

### **Daily Routine on Campus**

There were not alarms or chimes around SPC, and no public announcement system. Therefore it was up to students and staff to be where they were supposed to be on time. That meant all people needed to be conscious of:

0720 am breakfast

0820 to 1300 pm lessons  
1320 to 1400 pm lunch  
1500 to 1600 pm optional classes, learning activity  
1700 to 1800 pm play /sport activity  
1820 to 1900 dinner  
1900 to 2000 optional evening lesson  
2200 lights out outside

Students had to wake up, do laundry, shower and prepare for bed, not to mention do homework around this schedule. Most KU students did not leave the campus much during the week and they did not have to. Exceptions were weekends and holidays when breakfast was at 0820 am and there were no lessons.

SPC reception was open from 8 am to 5 pm for inquiries and for borrowing sports equipment for the basketball or tennis courts.

### **Dormitory Accommodation Facilities**

As a part of the English-only community in SPC, dormitory accommodation is important. In principle, students with the same L1 do not share the same dormitory room. Dormitory rooms accommodate up to four students, and KU students at times shared with just one other in their three weeks there. Besides Japanese, other nationalities included French, Korean, Colombian, German, Brazilian, Taiwanese and Swiss with English of different levels. In such situations, roommates would need to adjust their English as part of accommodating each other in the room-share situation.

Dormitory rooms are laid out with an elevated bed accessed by a ladder, with a chair and desk a lockable box and closet space for hanging clothes, suitcases and so on, as shown in Figure 9. Also there is a small refrigerator near the door of each room. There are lamps for each the bed and each desk. Only students staying in a particular room are allowed to enter it, and students should neither invite other students to nor enter each other's rooms. Each student received a key to their own room, with locks available for their individual secure boxes (students should bring their own).



Figure9: A Student's Bed, Desk, Shelves and Secure Box in a Dormitory Room

Naturally dormitories are gender-segregated as are share-bathrooms and showers at two locations on campus.

Dormitory accommodation cost A\$250 (approximately 22,000 yen at current rate of 90 yen = A\$1) for placement fee, then A\$245 per week for three weeks for the KU students. For three weeks this totaled A\$970 (87,500 yen), but if over four weeks, it would cost A\$1,215 (109,350 yen). Compared with



homestay cost (explained below), on a per-week basis, dormitory accommodation is 22% cheaper. If KU students had stayed in dormitory accommodation for the full four weeks, cost of the total fee to SPC would have been reduced almost 10% if extra placement fees are calculated in. However, it needs to be remembered that accommodation does include three meals per day, which normally is not included in overall cost at any other language college in Cairns and probably in Australia.

### **SPC Meals and Alternatives**

In the cafeteria in mornings, after midday and in evenings, professional and intern staff prepared meals often for over 120 people in the first week but for fewer than 80 in Week 4. However frequently amounts of food were copious, even excessive. Service was buffet style (see picture), people lining up with plates to be served a choice of one to three meat dishes, occasionally fish, pasta and/or potatoes, or casserole or meat-vegetable combinations, then steamed rice, salad, and side dishes like olives, beans or other pickles. Sliced bread was available and could be toasted for breakfast. Breakfast was cereal, one or two types of fruit, scrambled, boiled or fried egg with bacon or ham and toast with butter and spreads. Instant coffee was also available. Once a week a special menu was served, including crocodile and kangaroo meat or a Sunday lunchtime barbeque.

Frequently more food was made than could be served. Also, unlike my first visit to SPC in 2014, there was no reckoning of actual numbers of people to serve. One consequence was that students could and did go and eat out sometimes: in the nearby Kewarra Beach and Trinity Beach shopping centers, small food shops selling fish and chips, hamburgers and kebabs were popular (costing A\$8-12/700-1,100 yen).



Meals were also a time of social engagement, students sitting around in close proximity indoors and outdoors al fresco in the cafeteria. Therefore even reclusive students were conscious of the English-only discourses going on around them. Moreover, anything besides English would be quickly heard and likely to be frowned upon by people around.

Meal times were an opportunity for me to monitor and talk to KU students, which removed need for regular daily meetings. In the first three weeks, KU students had almost all their meals at SPC, except for excursion times. Surprisingly even in Week 4 all students had lunch and three students regularly ate dinner at SPC, even though homestay was supposed to provide their meals.

### **Excursions**

‘Excursions’ here broadly means any time students went out from SPC. All students went out to nearby Kewarra Beach shops at least once a week. Otherwise walking to Kewarra Beach (about 15minutes’ walk) or Trinity Beach (20 minutes’ walk), to see sunrises or sunsets and especially for Friday night ‘graduation parties’.

Besides these, students were dependent on buses. Just outside SPC was a stop for buses to Smithfield and to Cairns City, costing A\$5.50 for a single trip or A\$11 for a whole day (500 & 1,000 yen). As mentioned earlier, there was the Cairns Festival in the first two weeks, visited by all students at least once. There were parades, markets and fireworks over the water in the center of Cairns. Three students went on day trips to Green Island on the Great Barrier Reef (A\$94, or 8,800 yen), and four went on to Kuranda on the Skyrail (A\$77/7,000 yen) return, a cable car running through and stopping in natural rainforest canopy going to Kuranda, a hill village with craft and food markets and animal parks where koalas can be held. These are common and popular tourist excursions in Cairns, a well-known tropical holiday destination, though numerous others are available.

SPC does not offer excursions and none had been advertised for the study tour. One reason was that information gathering and organizing becomes a real-life task requiring students' use of English in a local context. On the other hand there is the issue of student desire or expectation that excursions be offered as part of a study tour to a place like Cairns, if possible without driving up cost.

### **Progress Test, Class Promotion and Other Tests**

Coincidentally an end-of-teaching-cycle progress test occurred at the end of Week 3. Tests were from the *Active Teach multimedia* materials for each level linked with *Cutting Edge* syllabus materials, available online from Pearson Education. All KU students did the test for their levels and all students were promoted to Intermediate or above (see list in 'Orientation & Placement' above to correlate levels with CEFR bands). In lieu of other tests, timing for this promotion test was convenient for students to gauge their English levels away from their home Japanese language-learning contexts.

Also however, as communicative as the teaching and course regime is at SPC, the progress test was limited to just language form and the four skills (reading, listening, writing and speaking), rather than the wider context for literacies and social interactions involving language that exists in SPC and in Cairns. This point is just incidental, as students placed faith in the test to register their English levels despite their communicative competence in the out-of-class English regime. In class always was the real, immediate context for students' perceived immediate need for English.

Rather, the real test is how students feel and what they take away from the SPC-Cairns experience.

Regarding other tests, including official ones, SPC is an accredited test site for TOEIC. During the study tour one test day occurred (Friday 8<sup>th</sup> September). One KU student was interested but balked at the cost of A\$180 (17,200 yen) on realising that she could do TOEIC for free back at KU.

### **Week 4**

Week 4 began at 8:30 am on Saturday 9<sup>th</sup> September when homestay family parents arrived to pick up KU students to take them home. All students were in next-level classes. It would seem that they were becoming familiar with classmates, especially as often they would be promoted together and this was the

case to an extent. There also were students graduating and new students arriving each week providing new faces. Though students continued being at the school, the change to homestay accommodation added another dimension to their study tour experience.

### **Homestay**

The point of the homestay accommodation option was to offer students an opportunity to see and experience local home culture that was not possible in the somewhat hybrid culture inside SPC. Homestay is quite a normal option at many educational institutions for international students, not just in Australia. However SPC had advertised proximity of homestay families within short walk or bicycle ride from the college, in contrast to other city-based institutions offering homestay at distant locations accessible by expensive unfamiliar public transport.

As it turned out, two KU students stayed with families within five-minutes walk of SPC, two more were 5-10 minutes bicycle ride away and three others were driven and collected each day by car from Smithfield about six kilometres away. This was not quite what had been advertised but was safer for students than big-city commuting. Interestingly, the two students who walked would stay at SPC as late as possible and even ate dinner there most nights despite having paid for meals at homestay.

All homestay households comprised two parents with two to three children from adult to very young. Students were allocated their own rooms with designated bathrooms. All students had breakfast there, however all ate lunch at SPC and all but two would return home for dinner.

While two students reported spending significant amounts of time interacting (cooking with, talking, playing with young children), most students spent considerable amounts of non-lesson time at SPC. As well, questionnaire feedback suggests that homestay was not a significant aspect of the study tour for students (see Student Feedback section). In fact students talked about the community inside SPC (classmates, teachers, staff, activities and so on) more favourably. Homestay could be an option, but the lower cost of dormitory-only accommodation as another option needs to be considered.

### **Activities**

Mornings were for lessons at SPC, afternoons were for activities. Also weekends. Even cleaning rooms was an activity. A calendar for September is shown in Figure 10. Three out of seven KU students took part in active sports activities on most days (tennis, dodge ball, soccer) played by themselves. Very popular with female students was Zumba dance-exercise each week. However organized activities advertised on the calendar did not seem clearly advertised nor coordinated. This was surprising given that SPC has its school regimen and in itself is a relatively closed community.

Though SPC has three pools, most mornings and afternoons the main heated 25-meter pool was let out to local swimming clubs' training. Even I approaching the pool was told tersely not to enter by club officials, or that one lane out of six could be used by SPC for slow swimming training. Understandably

students would be put off by such advice. When not used by local community, the pools seemed quite unused, and SPC reception staff could not tell exactly when unused times would be. This was all unfortunate because swimming at the local beautiful beaches can be dangerous due to risk of crocodiles and poisonous jellyfish in summer. Therefore the pools initially seemed like a big attraction. Further, use of pools relax to cool off more than for regulated training swimming laps seems like common sense to students coming to SPC from the outside.

It is clear that a lot more clarity and coordination is needed regarding SPC activities, especially if they are to be used as part of the social and health aspects of life there. One exception however was the Ironman Race on Sunday 9<sup>th</sup> September. This was a 4-kilometer run followed by a 500-meter swim in the pool. Staggered lighter versions were run simultaneously for less sporty participants. However it was quite competitive (see picture). One KU student actually came second. Finally an outdoor barbeque (lunch) including lamb, crocodile and kangaroo meats and even beer ended a highlight, high-interest activity, all in an English-only milieu.



The Ironman Race is a perfect example of a time for skill – and confidence - improving social interaction using English. Similarly coordinated running of activities could enhance the potential for this at SPC.

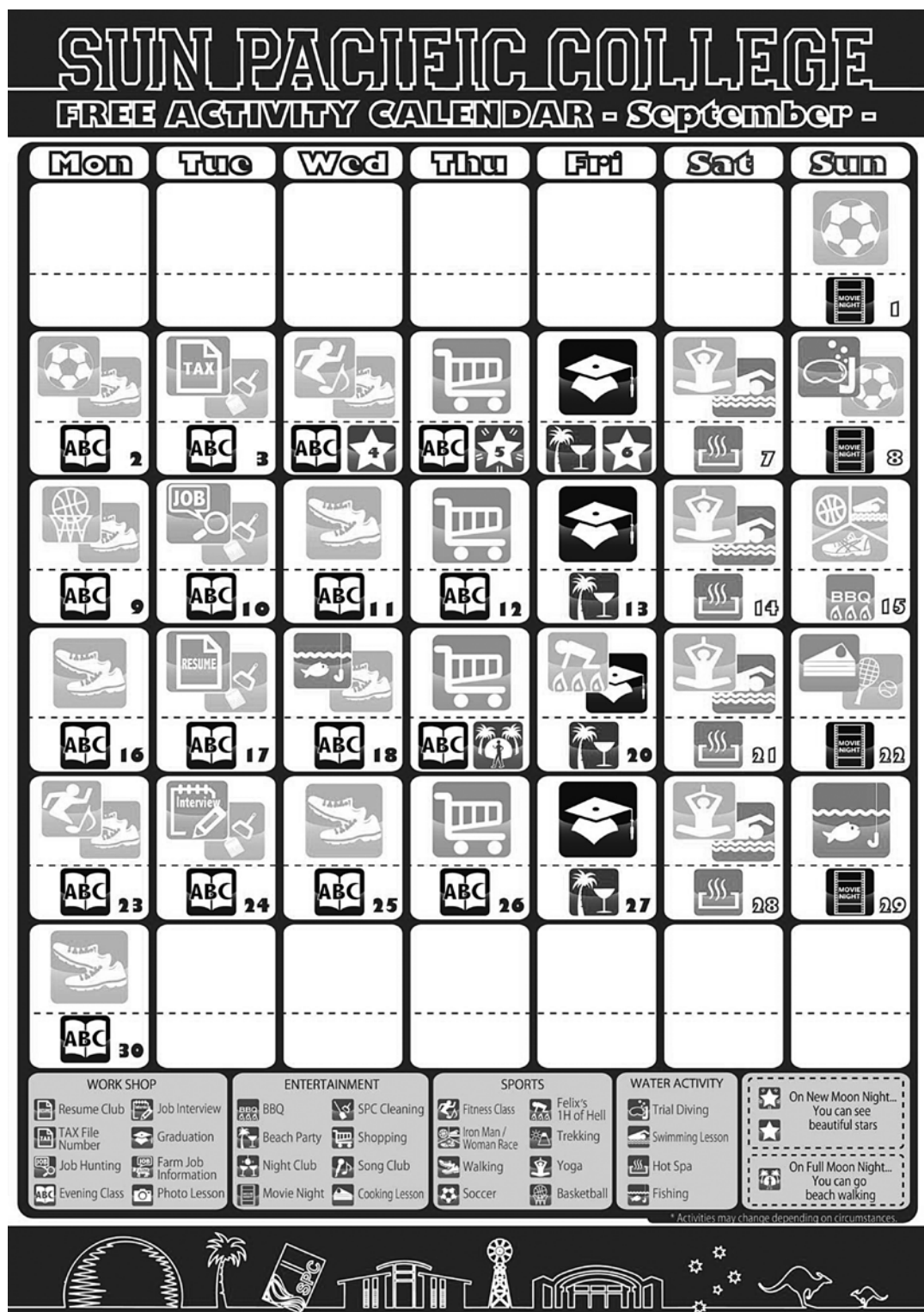


Figure10: SPC Activity Calendar for September 2017

## Social Life

Besides activities, lessons and mealtimes, the most social occasions were when students did homework. While monitoring KU students, usually they were with other students in their classes but with other L1s, discussing and doing assigned tasks in groups of three or four and all in English. Other social activities were night walks for stargazing and also Friday night graduation parties at Trinity beach.

The last activity was an exception to the English-only rule because it was celebratory and a relaxation occasion. At the end of Trinity Beach, there are free electric barbeques, picnic tables and benches where often over half the SPC student population attended bringing their own food and drinks. After the KU students graduated, five attended to the informal party at Trinity Beach, and so did I. This time there was more translingual use of English (English together with other languages as appropriate) however people stayed in groups with code-switching and mixing along with other accommodating and natural translingual behaviour (Canagarajah 2013, Jenkins 2015), which generally were avoided or frowned upon on the SPC campus. KU students all behaved like they were accustomed to this multilingual situation, among people who were better and not as good as them in English. Everyone was communicating and English even as lingua franca became just one of mode in the students' communication skill repertoire. The party situation was characterised by the need to relax and interact without inhibitive conditions. In a sense, this was more real-world for the students than SPC or even local Cairns could be. Also, the highly multi-cultural party community was one in which the students appeared comfortable at the end



### **Graduation**

Graduation took place at 12:30 pm on Friday 15<sup>th</sup> September. Each graduand was presented individually to the audience of staff, students, homestay family members and others. Though it was anticipated that they would each make a short speech, only the two upper-intermediate KU graduands did so.



Afterwards each graduand was photographed with teachers, and with me.



The seven KU students were among 15 who graduated that day, as well as seven new students from Japan, Germany, Switzerland, Taiwan and Brazil, who were welcomed for periods of study from

two weeks to several months.

### **Return**

By 9 am on Saturday 16<sup>th</sup> September, all the students had been brought to the SPC campus to be taken to the airport by shuttle bus. At the



airport for the return Jetstar flight, no student had overweight luggage (over 20 kilograms) despite many packets of macadamia nuts, chocolates, T-shirts and other gifts and souvenirs. The daytime Jetstar flight was uneventful. Reaching Kansai International Airport at 7 in the evening, no problems were encountered and students proceeded home on their own from there.

With all students safely back, and no emergencies or incidents, the study tour to Cairns appears to have been successful. Next this assertion is discussed in relation to students' own views.

## **6 Students' views:**

This section presents feedback from a questionnaire distributed to students, as well as written reports from them (see Appendices 2,3 and 4). Originally a 16-page extensive questionnaire was distributed to students when we left Cairns. The purpose of such a long questionnaire was to provide a template for students to plan and write reports (eventually just one out of 7 did this). Subsequently back in Kochi in October, a shorter version incorporating 5-point Likert-Item questions from the original questionnaire was distributed (see Appendix 1) Five were returned and findings from them are presented here.

With such a small number, no findings can be generalizable. However, it is opportune to pay attention to any results with 100% consensus (ie. all have the same answer) among respondents

### **• Preparation:**

- all said they needed to do 'much preparation', and the coordinator was 'very helpful'

- **Travel to Cairns and SPC**
  - The flight to Cairns was 'OK' for some and 'wonderful for one, with just 2 mentioning any problem'
- **SPC – First Impressions,**
  - 2 found SPC 'not as good as expected', 2 responded 'better than expected'
- **SPC Orientation and Placement Test**
  - everyone rated Orientation as 'clear'
  - no consensus over the placement test but everyone agreed with results (ie. levels of class placements)
- **SPC English Lessons:**
  - 4 students rated lessons as 60% to 100% 'active' (eg. 'asking questions', 'interviewing', 'groupwork', 'games', 'activities similar to games')
  - everyone said they learned 'much' or 'lots and lots' of English
  - among listening/reading/writing/speaking, 'speaking' scored narrowly over 'listening' as getting most attention in lessons
  - similarly 'much' attention in lessons was given to 'vocabulary' and 'communication' with 'culture', 'pronunciation' and 'grammar' not rating significantly
  - all students thought that their 'competence (ie. how good you are)' had become 'better', but for their 'confidence (ie. not shy, you feel OK about using English)' half (2) said 'a little better', the others 'better'
- **Classrooms, Computers**
  - no consensus, but all students rating 'OK' or above for classrooms, and use of computers being from 'never' to 'often'
- **SPC Notebook/Journal**
  - this was rated as 'a bit useful' (2) and 'useful' (3)
- **English-Only Rule:**
  - all students 'agree' or 'strongly agree' with the rule, and all said they followed the rule 'all' or 'almost all' the time
- **Accommodation:**
  - all students preferred dormitories
- **Dormitories:**
  - all but one student responded 'good' or 'very good'
  - all but one described room-mates as 'good' or 'wonderful' though most interacted with them only sometimes
  - 4 out of 5 said the English-only rule in dormitories was followed 'always', one saying 'normally'
- **Homestay:**
  - 3 students rated homestay as 'not so good', one as 'OK' and one as 'good'
  - all students said that they 'learned something' in homestay, especially mentioning 'Australian slang' and 'pronunciation'
- **Meals, Welfare and Environment at SPC**
  - all students described the meals as having 'various things' to eat, 'enough' quantity and 'a bit



- healthy' regarding nutrition, though their evaluations ranged from 'OK' to 'very good'
- preparation was described as 'sometimes professional' (2) and 'very good, professional' (3)
- 'garlic balls' were a noticeable favourite dish
- washing machines were described mainly as 'OK' (3)
- 'non-teaching staff' were found to be 'average' (2), 'good' (2) and 'very good' (1), and all students felt 'looked after' 'some' (2) and 'much' (3)
- the gardens around SPC were described as 'nice' and 'very nice' and the grounds were found to be 'tidy and clean' (4) and 'spotless' (1)
- however students said they found 'nothing special' about the buildings
- the Wi-Fi at SPC was found to be 'bad' (2), 'slow, not so good' (2) and 'good' (1)
- **The Kewarra Beach area, Smithfield, Cairns City and other places**
  - regarding going out in the Kewarra Beach area around SPC, one student said 'never', two 'sometimes' and two went 'often'
  - rather than nearby Smithfield shopping centre, students all said that they went to Cairns City 'often'
  - asked if going out in Cairns helped with learning English, all students responded 'yes, much'
- **Tours and Tourist Places**
  - three students said that 'being a tourist was one reason' they chose to go to SPC
  - Kuranda and the Skyrail cable car through the rainforest up there were nominal favourite tourist places.
- **Leaving SPC, Cairns and the Trip Back to Japan**
  - 4 students were 'sad' to leave SPC and one was 'happy', but no one was happy to leave Cairns
  - 4 students said the trip back gave them 'a big impression', though the Jetstar flight was nothing special
- **Students' English**
  - all students selected 'helpful and useful' to 'very helpful and useful' to describe immersion 'into an English-only environment'
  - all students self-assess their English as 'better' than before
  - responses to follow-up questions about competence and confidence with English produced the same results: their competence 'better', and 'confidence 2 saying 'a little better', the others 'better'. This was a double-check question and results correlate with the same point in feedback for the question in the 'SPC English Lessons' section
  - the English-only condition inside SPC was a consistent positive feature for the students
- **Overall**
  - Students were mixed about what they achieved from the study tour.
  - Students were also mixed about regarding the study tour as value for money
  - 4 out of 5 students said they spent about 500,000 yen in total; one estimated 400,000 yen
  - All students said they would 'probably recommend', 'recommend' or 'strongly recommend' SPC
  - general reasons included the strong likelihood of learning English, that SPC is 'comfortable'
  - one recommendation was to bring enough clothes for a week

### **Student Feedback Summary.**

Though all students seem to have improved their English in their view improvement was not substantial. Students were quite satisfied with SPC lessons, facilities and staff to the extent that most of them stayed around SPC even while staying at homestay. The social and community environment at SPC seems a strongly attractive point. An equally attractive point for them is the English-only rule which was repetitiously mentioned. Combining these points might hypothetically make a stronger learning dynamic than the lessons, regarding interactive confidence and competence. However, students still seem to consider classroom lesson-based learning as primary if not only way that they learn English. One other surprising finding was student preference for dormitory accommodation. Finally the fact that they would recommend SPC is also a good sign.

## **7 Recommendations**

There have been many promising signs of success of this study tour. Based on this experience some recommendations can be made. They are set down below:

1. It is recommended that SPC in Cairns be maintained as a study tour destination for Kochi University students. There are three main reasons:
  - i . Relative proximity (7-hour direct flight from Japan)
  - ii . English-only environment
  - iii . Strong healthy community among students and staff in a safe, secure environment.
2. The August-September schedule was idea climate-wise, though one week later (so students would leave after 20<sup>th</sup> August and return after 29<sup>th</sup> September) is advisable to avoid short-term school and university groups common in until the middle of August. Japanese spring holidays are another option, but higher summer temperatures plus end of rainy season (like Japanese July-August).
3. Bringing start of preparation back to April rather than May/June gives more time to students with no overseas travel experience (eg. with passports, credit cards, visas) to prepare, especially if they are to hold responsibility for preparation.
4. Regarding preparation, having a group of interested students decide early on whether to get a travel agent or consultant to organize everything (easier but expensive) OR by themselves (cheaper, good for experiential learning but troublesome) Therefore, before formally beginning the study tour, various travel agents should be contacted for quotes AS WELL AS an expense quotation for students to organize bookings, payments, insurance etc. themselves.
5. It is recommended that the autonomy and, consciousness and experience aspects of learning be more clearly schematised for students. This could be done partly by using sub-headings in this report. This can be done as journal diary for students to record what they need to do and any thoughts about it. Though in English is preferable, students should be permitted use of Japanese as appropriate. Further, the same instrument can be used as basis of a student report later.
6. As coordinator, I stayed with students at SPC for the whole four weeks. My role this time was to monitor and observe, but otherwise there was no clear role for me to perform. Though KU

personnel is a requirement regarding insurance and liability, four weeks is too long given their other work and so forth. Equally, if the need to have KU staff were otherwise to inhibit this study tour taking place, it would be students' loss of an opportunity the end. For longer term viability, it is suggested that some kind of ongoing arrangement or agreement between KU and SPC be made.

7. It is not necessary for any content contribution to the SPC program from KU. However, obviously the coordinator or some responsible person at KU should be aware of the course and learning content at SPC.
8. Recommendations 1 and 7 notwithstanding, it is strongly recommended that KU have open and better advertised options for students to go offshore for learning English through use and experience as well as courses of lessons in class. A more holistic and purposefully real-world approach to learning English is sorely needed.

### Acknowledgements

At Sun Pacific College, special thanks to Crissy Lee for liaising advising and administrating for our study tour (and for nice coffee one down at Kewarra Beach). Also to Kiyomi who helped in 2014 and who I could meet again in September. Many thanks to Vicky, the DOS, with whom I had a few chats of a serious and not-so-serious nature. Thanks also to non-academic staff who assisted with questions, directions and doing things to keep all the students safe and content: Yuka who met us, Maki and Tsuis. And Ted. And to Taka whose guiding ideas make a lot of sense and work in Cairns.

I wish also to express thanks to the Kochi University International Studies Course 留学・実習委員会 (Kochi University International Studies Course Overseas Study and Exchange Committee) who gave the 'OK' for the English Immersion Study Tour to go ahead enabling funds towards my going with the seven students.

Finally thanks to Ayaka, Daisuke, Kaena, Akari H., Akari T., Tomoko and Takumi for being the students who became the tour – I hope you never forget.

### References

Canagarajah, S. (2013) *Translingual Practice: Global Englishes and Cosmopolitan Relations*. Abingdon: Routledge

Cook, V. (2012) Characteristics of L2 Users (Retrieved from <http://homepage.ntlworld.com/vivian.c/SLA/Multicompetence/>)

Cutting Edge 3<sup>rd</sup> Edition (2014) Harlow: Pearson Education Limited. Breakdown of the *Cutting Edge* series can be found at <https://www.pearsonelt.com/catalogue/general-english/cutting-edge-3e.html> (Retrieved 13 September 2017)

CEFR (Self-Assessment grid Retrieved from <https://rm.coe.int/168045bb52> on 4 October 2107. See <https://rm.coe.int/1680459f97> for the full version of the *Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment* document)

Doyle, H. (2017a) *Blended Teaching & Learning: MOOCs as viable option*. PowerPoint Booklet for Professional Development Presentation at Sun Pacific College, Kewarra Beach, Queensland, Australia on 8 March 2017

Doyle, H. (2017b forthcoming) MOOCs, Blended Learning and Language Learning. *Research Reports of Department of International Studies*, Faculty of Humanities and Economics, Kochi University. 18

Ellis, R. (1994) *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford: Oxford University Press

Krashen, S. (1981) *Second language acquisition and second language learning*. Pergamon. First Internet Edition December 2002

Jenkins, J. (2015) Repositioning English and multilingualism in English as a Lingua Franca. In *Englishes in Practice*. 2(3): 49-85

Jenkins, J. (2017) Trouble with English?. Chapter in Kelly, M. (Ed) (2017 In Press) *Languages after Brexit: How the UK speaks to the world*. London: Palgrave Macmillan. (Retrieved 11 October 2017 from [https://www.researchgate.net/publication/320225862\\_Trouble\\_with\\_English](https://www.researchgate.net/publication/320225862_Trouble_with_English))

Jenkins, J. & Leung, C. (2017) Assessing English as a lingua franca. In S. May (ed.) *Language Testing and Assessment, Vol 7 of Encyclopedia of Language and Education 2<sup>nd</sup> Edition*. New York: Springer. (Retrieved on 9 October 2017 from [https://www.researchgate.net/publication/303371859\\_Assessing\\_English\\_as\\_a\\_Lingua\\_Franca](https://www.researchgate.net/publication/303371859_Assessing_English_as_a_Lingua_Franca))

Lave, J. & Wenger, E. (1991) *Situated Learning: Legitimate peripheral participation*. Cambridge: Cambridge University Press.

NEAS Quality Assurance Framework (2014) (Retrieved from [http://www.neas.org.au/wp-content/uploads/NEAS-QA-Framework-Quality-Principles\\_2014.pdf](http://www.neas.org.au/wp-content/uploads/NEAS-QA-Framework-Quality-Principles_2014.pdf). A new version appeared in November 2017 - *ELICOS Standards 2018* - , but was not applicable at time of the Study Tour nor this report).)

[www.venturesbooks.cz/images/download/Materialy\\_WEB\\_CZ/17\\_-\\_Pro\\_ucitele\\_materialy/161-cutegpla-pdf.pdf](http://www.venturesbooks.cz/images/download/Materialy_WEB_CZ/17_-_Pro_ucitele_materialy/161-cutegpla-pdf.pdf) (Retrieved 4 October 2017)

## Appendix 1

### Study tour to Sun Pacific College in Australia: report

Akari Hiyama

#### 1. How did I get interested in the SPC and my aims

I went to Sun Pacific College (SPC) Cairns in Australia this summer vacation (see picture). I originally wanted to go to Australia. I talked to my friend about this. Then, she told me this study tour.

My aims were improvement of English skills like listening, speaking. And I wanted to be able to use English without being shy.



#### 2. Preparation

To get the air tickets was first time for me. It was not difficult, but I was worried whether the tickets were properly taken or not. Round-trip fare was about 77000 yen. My father gave me 400,000 yen. From this, I paid entrance fee, airfare, travel insurance, and others. I bought souvenirs my money. In Australia, I had opportunities which I had to pay by cash. I had exchanged money, but not so much. Therefore, cash was running. If I could use a credit card, I should have used it as possible as because withdrawal from ATM costs fee. I think if it's for a monthly stay, it's enough for clothes to have for one week.

#### 3. Travel to Cairns and SPC

KIX to Cairns Airport took about 7 hours. We departed KIX at night and we arrived Cairns Airport early next morning. I ate dinner and breakfast in the airplane. In the airplane, my friend sat down next seat so I could relax. But I couldn't sleep well. Cairns airport to SPC took about 30 minutes by a bus. From when we entered SPC, we started to speak only English.

#### 4. SPC Orientation

Our orientation was done by Janus. He was very powerful. His voice was big and he had a good smile. Orientation was clear because he talked about SPC with using a whiteboard. My advice is taking a picture of a whiteboard. We took a placement test at that time.

#### 5. SPC English Lesson Placement

I thought a placement test wasn't so difficult. A little difficult. It was listening test and writing test (grammar, vocabulary, reading). First, I was intermediate class. It was just class for me. The third week, we took a big test. It's held regularly. Depending on the result, students were divided. My class was 1 up, I got intermediate plus.

Lessons were almost always fun. Teachers in charge often changed. There were about 10 teachers and some staffs. The lessons mainly consisted of teachers talk and conversation between students. Materials were textbooks. We studied based on them. Students were about 20 students per class. Lessons were just

active learning. One lesson was 90 minutes. It's same university class but I always felt that the class time would be much faster than university, because I really enjoyed the lessons and learned lots. Lessons were only in the morning but we could take a option class after lunch. The theme of learning changed every week. For example, Australian cultures, music and TOEIC. Few students took it. It was fun and useful. By taking a option class, I got along well with other students and teachers.

I did homework every day. In addition, I wrote a journal like diary. Because of them and classes, my competence and confidence with English certainly were better. I think that it is important to keep using English daily as well as experiences.



## 6. English-Only Rule

I agree with English-only rule. Because speaking English only makes it easy for everyone to talk. If I were talking to my friends in Japanese, people who don't understand Japanese can't join conversations. In SPC, everyone spoke English, so we understood other conversations. There was a spot where we could mother languages called

the 'tree house'. We couldn't talk there. We could just call overseas.

## 7. Accommodation

I stayed in a dormitory for 3 weeks, then I moved to homestay for last 1 week. Dormitories were good. I stayed in a quadruple room. The first week, I shared with a German girl. We entered SPC same time. The second week, a Japanese girl joined our room. The third week, a Brazilian girl joined. We sometimes talked about each other. In the dormitories, we ate breakfast, lunch and dinner each at appointed times. We could take a shower all the time. Shower rooms weren't so many, but they weren't always crowded.

I stayed at homestay for last 1 week. It wasn't so good for me. I always missed dormitories. My host parents were young and had three kids and two dogs and a cat. The host parents were kind. They took me a bus station every morning. But I didn't know how to deal with my host family. I couldn't relax at home. My host house was located a bit far away from SPC. Therefore, I had to take a bus to and from SPC. Taking a bus took times and the accumulation of bus fare every day was expensive. If I still stayed at dormitories, it didn't take times and cost money. I also missed having to leave my new friends at SPC. These experiences were undoubtedly important for my life. But I recommend dormitories.

## 8. SPS Site, Facilities and Activities

I danced Zumba every Monday in the tennis court (see picture). A teacher came to SPC and we danced with her for one hour. I loved it! I want to dance it again. I always did it with some students. I also played dodgeball, basketball and tennis with some students. They helped me to make friends.



## 9. Meals, Welfare and Environment

I liked SPC foods. They weren't always very good. Sometimes, I didn't like them. But they were almost good. I often took seconds. Breakfast times, we could eat breads, cereals, some fruits. Lunch and dinner were almost same qualities. These times, there were 2 or 3 variety meats and I ate a lot of vegetable salads.

## 10. My memories in Cairns

I visited many places in Cairns. I went to Kuranda with my friends by Skyrail. Skyrail fare was so expensive. We watched Aborigine show in the Rainforest Nature Park Kuranda (see picture). It was fun and my friend joined the show.



We went to James Cook University. It's the nearest university from SPC. Then, I found a vending machine for teeth (see picture). I was surprised. They were samples. Maybe, they are used study of students.

The Kewarra Beach Area is located about 10 minutes on foot from the SPC. We could see sunset there (see picture).

## 11. Overall

I could learn a lot of things and make wonderful memories and friends (see picture). When we left Australia, despite of early morning, many students saw us off at SPC. Surprisingly, my friends gave me letters. I was so happy and feel lonely. I stayed there only 4 weeks, however it was 4 weeks. I never forget these times and people. I want to see my SPC friends again. My English skills improved, but of course they are still immature. I got lots of experience. What I decided to come to SPC was a good choice. I recommend everyone to go to SPC.



## Appendix 2

### Sun Pacific College Life in Australia

Kaena Kawamura

The reason why I decided to go to Sun Pacific College was to improve my English ability and I was interested in SPCs strict English only rule: if I speak mother language, kick out from school.

I didn't want to waste my summer vacation and I wanted something to try and challenge during vacation.

But I couldn't decide myself. When the deadline day, I went to Korean restaurant Ariran with my friend Akari. It was the first time to go to dinner with her. And then I told her about the study tour. She cheers up me, and also she was interested in it. So, we sent e-mails to Howard Doyle and he let us apply.



#### My first impression

When I arrived at Cairns airport, I thought here is similar with Kochi. Kochi also has a comfortable temperature, so I could become familiar quickly.

Cairns has good beaches, surrounded by mountains. And Aussies wearing no shoes made me so surprised. Even 2-years old children also don't wear shoes. I couldn't believe my eyes. But I got used to this habit. Sometimes I also played with my host family in bare feet.

One other thing, prices were high for us. I should save my money.

#### Smoking Area Communication

I used to smoke cigarettes in Japan. But I didn't bring my own when I was packing my suitcase. I was thinking if I don't smoke one month, I am okay! But I couldn't stop smoking and bought some cigarettes at a liquor shop in the first week.



My friend told me, he could make more friends while smoking than in the classroom. I agree with him.

When I went to the smoking space in SPC any time, definitely someone was there. And we greeted each other and were chatting a few sentences. Then this situation continued every day, and everyone became to know each other.

For smokers, I think the Smoking area was good for starting communication with students, especially upper-class students, and also staff.

8.30 - 1.00	Main Class
1.00 - 2.00	Lunch
2.00 - 3.00	Options Class/Homework
3.15 - 4.00	Consultation (Classroom 1)
7.00 - 8.30	Evening Class (Classroom 1)
8.30 - 9.30	Evening run

## Recommendation

I think one month was little too short to study English. SPC was a good school to study. They have 3 core classes, option classes, and evening classes. Even don't take extra class, there have a lot of free time to study after we finish lunch.

Every Friday was test day and we could review how we understood the class. And every 3 weeks, a big test is done. It is testing to changing class. Students study hard to go to higher classes. We took this test in the second last week. And I could change my class to Intermediate+.

I recommend taking the big test. I took tests 3 times while staying in staying SPC. So, I think a half year is the best length of time to stay at SPC. Then we can go up many higher classes.

In my opinion, making a rival friend in the same class is needed. We can encourage each other and study harder with them. My classmate who had stayed a long time at SPC was aiming to go to upper classes with another student. It is one of good way to gain and extend ones English ability.

SUN PACIFIC COLLEGE		
Friday Timetable		
8:30 - 10:00	90 min	Core Class 1
10:00 - 10:15	15 min	Break
10:15 - 11:45	90 min	Core Class 2
11:45 - 12:00	15 min	Break
12:00 - 12:30	60 min	Core Class 3 Focus Class
12:30 - 1:00		Graduation
1:00 - 2:00	60 min	Lunch
2:00 - 3:00	60 min	Progress Test Students who do not attend may not be considered for a level change.

## What I learn from SPC

Possessiveness and making my own goal are important. I think trying to communicate with no hesitation is the best way and is needed in any situation. I want to keep challenging positively.

## Appendix 3

### SPC Report

Takumi Ide



I have never been abroad. This was the first time. So, the preparation for going to Australia was very difficult. I had to make a passport, Visa, and debit card and so on. But they could be my good experience. When I go abroad again, I can prepare for it much more quickly.

Anyway, I want to write about SPC's education because I would like to be a teacher and I'm interested in education. SPC has classes from 8:30am to 1:10pm. It includes about an hour rest time. So, actual class time is just about 4 hours. It is much shorter than Japanese classes.

But instead, the classes are intensive and active. In the classes, we can learn writing, reading, and listening. Of course, we always have to speak English, so we can learn speaking the most. What I was really surprised is that the classes are so free. Although probably it depends on teachers, we can go out of a class room to do something, eat or drink something in a class room, and ask a teacher lots of questions while he or she is speaking. If teachers in Japan see this situation, they will think that the class is broken. However, the students study English even harder than in Japanese ones. I think it is because they have to learn English within a limited time.

Japanese students do not have this thought. They tend to say "We are Japanese. We don't need to speak English." Japan should change the English education.

Recently, English education in Japan is changing. Active learning has been introduced, but it is not enough. English classes in Japan have few activities. On the other hand, almost all time in SPC classes are used for activities. Sometimes, teachers cooperate with each other, and two different classes can have an activity together. I think both teachers and students should be active about English. I want all English teachers in Japan to see SPC education to change the style of their classes. I will refer to SPC education and my experience there in the future.

## 「2017年度 北京スタディツアー」報告書

人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース  
高橋 俊

高知大学 人文社会科学部 人文社会科学科 国際社会コース開講  
「国際社会実習（外国語実習）Ⅱ」

期 間：2017年8月20日（日）～31日（木）

実習先：中国北京市北京語言大学

引率者：高橋 俊

実習内容：

8月21日（月）：クラス分けテスト、授業開始

8月22日（火）～：現地の教員による中国語の授業

8月26日（土）：万里の長城参観

8月30日（水）：修了試験

本スタディツアーには学部・コースや学年がバラバラの9名の学生が参加した。

本スタディツアーは、学生の自主性を重視した。教員がテーマを与えたり活動を促すのではなく、学生が自らテーマを設定し、自分たちで活動することを重要視したのである。

そのため、最初学生は大学の授業に出るだけで精一杯のようであったが、やがてそれぞれが、自らのテーマに沿って活動し、情報収集するようになっていった。

また、このスタディツアーではとくにチームとしての活動は念頭になかったが、ともに生活する中で、それぞれが刺激し合い、助け合うようになっていった。とくに、体調不良の学生が出た時には、他の学生は進んでその学生の世話をし、フォローするようになったのである。

そして何よりも、学生の報告書にあるように、みなが中国の「今」を感じることができたのが、収穫であった。圧倒的な経済成長が語られる中国であり、その中でもとくに発展著しい首都・北京であるが、現在でも、日本で報道される中国は、ネガティブなイメージのことが多い。もちろん、そういうネガティブな中身のすべてがまったくの嘘である、とはいえないまでも、その偏りは明らかであるし、学生へのアンケートでも「中国のイメージは？」というと「パクリ」「PM2.5」などばかりが書かれている。

しかし、学生レポートにも多く触れられているように、ナマで見る中国人は、自分たちと変わらない、普通の人間である。などということは当たり前のことなのだが、中国（人）に対しては、こうした当たり前の感想を抱くことが難しくなっているのである。

本スタディツアーで学生たちが大きく成長した、とはいいすぎだろうが、少なくともそれぞれが何かを気づくことができた。レポートを読んで、私は確信している。

## 北京スタディツアー（2017.08.19-08.31）を通して感じたこと

B161G127H 高岡 舞

私は今回の北京スタディツアーから、現地の人とコミュニケーションをとるために、現地に直接行き、その土地や人柄を知りながら、会話力を育むことがいかに大切であるのか、主に深く考えることができました。

初めに、私が今回のスタディツアーに参加したきっかけとして、身の回りに中国語を母語とする人が多いということから、自分も中国語を使って人とコミュニケーションがしたいと思ったことが参加の一番の理由でした。そのほかにも参加前から、日本に留学する中国人の学生たちが1年や2年の日本語学習で、日本人とほぼ不自由なく会話ができることに驚いたことから、日本人の外国人に対する日本語教育や、中国の学生たちの学習法にとっても興味がありました。この2点から、私はスタディツアーへの参加を決めました。



スタディツアーにおける北京での過ごし方として、8時半から正午までは中国語の授業を受け、お昼は大学の食堂で食事をとり、14時から中国人のチューターの方と市内を観光する、という1日の流れでした。学校においてとても印象的だったことが、北京で一番狭いといわれているにも関わらず、高知大学の何倍も広い敷地面積と、学内のいたるところに「富国・民主・自由・平等・公正・愛国」と書かれた幕が見受けられたことでした。そのほかにも、実際に10日ほど現地で生活してみて、食堂でのお金の払い方や生活スタイルの違い、現地の人たちの親切さへの驚きから、先入観や固定観念にとらわれていたのだと実感しました。

街中では、人々がスマートフォンのアプリを使って、小黄車というだれでも利用できる自転車にアクセスし、交通手段として利用するという光景が見られたのですが、日本にはなく、とても画期的だと感心しました。まだ街中に導入されてから1年も経っていないと聞いたこの小黄車に実際に乗って現地の人たちと同じようにショッピングや映画を見に行く、といった経験ができました。また、街中を多く走る自動車ですが、自動車の数が多すぎるために、曜日ごとに自動車ナンバー別走行規制によって渋滞を緩和している事実があることも知りました。





上の写真にあるパン屋の紙袋を、はじめ見たときは人肉と書いてあって意味が分からず驚いたのですが、人肉というのは人の体のことであってお店に行かなくても、パンをデリバリーできるという意味であると中国人の方から聞いて勉強になった、ということがたくさん経験できました。

このことから、実際に現地に行って、人とコミュニケーションをとること、中国人と同じ生活を味わうことで、中国について新たな発見があり、言語を学習する上でやる気にもつながりましたし、将来に向けて的確な目標を持っていなかった自分に刺激を与える経験にもなりました。自分が何をしたいのかわからなかったのですが、今回のスタディツアーへの参加によって、中国語の会話力を向上させ、中国語でコミュニケーションを使った仕事がしたい、という目標を明確に立てられるようになり、自分にとってやるべきことがはっきり見えた、大切な経験になりました。

## 中国スタディツアーに参加して

人文社会科学部、人文社会科学科、人文科学コース、2回生  
B161G235U 宮地 麻未

今回私が中国に行こうと思ったきっかけは、本気で語学力を高めたいというよりは、夏休みだし時間も余っているから行ってみようかなという軽い気持ちだった。10日間という決して長くはない時間の滞在だけど、言葉も文化も違う環境に身を置いて生活したことは、結果として自分の狭い世界を少し広げることに役立ったと思う。10日間でもさまざまなところに行けたり、日本語ではない言葉で会話したりすることは楽しく、毎日が新鮮だった。イメージの中だけの世界と実際にみた世界とでは良い意味で全然違うことに気づいたし、中国人から見た日本のイメージも違うことが多くあるのだと知った。

20日に北京に到着して一番初めに思ったのは匂いが日本と違うことだ。

21日の授業はやはりピンインが難しい。そして午後から日本語を学んでいるという院生の三人とキャンパスを見て回ったとき大学が広いのと、建物の一つ一つが大きいので圧倒されていた。しかし胡さんいわく北京にある大学の中では小さいほうなのだというので驚きだ。大学の外に出てもみられる建物はたいてい大きく、高さもある。人口が多い分建物の規模も必然的に大きくなるのだと思った。夜は火鍋を食べたが量と安さに衝撃を受けた。

23日、パナソニックに行くときに北京の地下鉄を初めて利用した。地下鉄の路線は複雑だったけど案内表示が多くてわかりやすかった。パナソニックに勤めている方、特に女性のお話で自分の世界を広げる意味でもいろんなことに挑戦することは良い刺激をもらえるということを改めて実感したし、そういう生き方ができる人はカッコよく見えた。帰ってから夕飯を食べに飲食店に行ったが、メニューに書いてある料理のピンインが全く分からず、指をさして「这个」ということしかできなかった。店内で食べるか、持ち帰りかということと会計の時は中国語がわかったので少し達成



写真1 火鍋店にて



写真2 万里の長城の露店

感を感じたけど、「伝える」という行為について、言葉が違うだけでこんなに大変だとは思わなかった。

24日は天安門と南鑼鼓巷に行った。北京に行っていたのが、警備が日本より嚴重であるということだ。パスポートが必要な観光地もけっこうあったり、地下鉄も含め荷物検査があったりするのには日本にはない光景だと思った。

25日は万里の長城と鳥の巣があるオリンピック広場にいった。テレビやネット上だけでしか知らなかった場所に実際に自分の足で訪れているということに感動した。万里の長城の道中のにぎやかな露店で値切ったりするのは楽しかった。値切りすぎて追い払われたり、ぼったく

られたりしたのもなかなか日本ではできないことを体験したなと思うと面白かった。夜は胡さんおすすめの飲食店で夕飯を食べたとき、魚の料理とだけあって何の魚かよくわからなかったがおいしかった。

28日は頤和園に行った。中国感がとてもすごく昔の皇帝もここで夕日を眺めていたんだとしみじみした。夜は胡さんの出身州である西安の料理を食べた。北京で食べる料理のなかで一番日本料理に近いように思った。西安で有名なびゃんびゃん麺という料理があり、この漢字は中国で1番画数が多くて130字あるらしい、おいしかった。

29日のテストはいままで習ったことが発揮できたと思うがピンインがやはりむずかしい。テストの後は北京動物園に行って、念願のパンダを見た。小さい子たちが「熊貓」と叫んでいて、動物の鳴き声というよりは人間がとてもにぎやかだった。



写真3 頤和園にて

30日はずっと気になっていた故宮にいった。授業で習った「水龙头」のもとになった竜の頭が並んでいるのを見ることができ満足した。景山公園に上ってみたうえからの故宮は雄大で迫力があつた。PM2.5がなければもう少しきれいにみえたかもしれないが、母がよく見ている中国の古代をテーマにしたドラマに出てくる世界だった。前門はとてもきれいで洗練された通りだった。

私は今回中国スタディツアーに参加して強く感じたのは、自分の知らない世界に行ってみることは自分の視野を広げることにつながるということだ。テレビや人から聞いたことだけで物事を決めつけてしまうよりは、実際に現地に行ってみる自分の目で見てみることの大切さを学んだ。イメージの中での中国は自分勝手な人が多く、治安がとても悪いなど決して好印象を持っている状態でスタディツアーに臨んだわけではなかった。しかし、中国を訪れてみると中国がまったくしゃべれないし、聞き取れもしない私たちにも親切な人が多かった。また夜でも表通りは一人で歩けるくらいに治安が良く驚いた。そしてなによりスマートフォンで会計をすませる人がほとんどであった。胡さんいわくこれを「無限金社会」というのだそうだ。自転車も自分のではなく、シェア自転車に乗っている人が街中で多く見られた。日本でも北海道で今度、導入されるらしいと中国人の院生の高さんが教えてくれた。どこに置いてもよいシェア自転車は私もぜひ利用したいと思った。

今回、中国人の友達もできて、そのうちひとりの胡さんは10月から高知大学に1年間留学するというので、北京でお世話になった恩返しをしたいと思う。



写真4 前門にて

## 北京スタディツアー

人文社会科学部 B161G177T

中川 陽奈

今回、北京スタディツアーに参加して日本と中国の食や文化の違いを実際に肌で感じる事ができた。私が北京で短期間であったが実際に生活してみて感じたこと、思ったことを述べていこうと思う。

まず私が一番興味を持ったのは食についてである。中国料理はもちろん、日本にもあるお菓子やジュース、レストランにも挑戦してみた。実際に本場中国の中国料理を食べると、自分の舌に合うものと合わないものとははっきり分かれ、あらためて日本で作られる中国料理らは日本人の口に合わせた料理であると認識できた。そして私が中国料理でおいしいと思った料理の一つが魚料理である。写真1のような魚料理を食べたのだが、日本は魚料理を食べる際、魚の種類なども見て選ぶことができるが、中国では何の魚が使われているのか分からなかった。味は少し辛かったが、とても大きな魚で、みんなでつついて食べることができた。さらに写真2は北京でよく飲まれているという「北水洋」という飲み物でこれもとてもおいしかった。



写真1



写真2



写真3



写真4

また中国にある日本と同じファストフード店やレストランは日本と同じような味なのかということに興味を持ち、中国にあるマクドナルドとサイゼリアに実際に行ってみた。マクドナルドは注文の仕方も味も日本とほとんど同じだった。写真3はハンバーガーの写真であるが、日本と同じクオリティーであった。中国のマクドナルドには宅配のサービスがあり、そのことに驚いた。しかし一番驚いたことは客の行動である。食べ終わった後、日本ではゴミを捨ててから店を出るが、中国では食べ終わったあとそのままゴミを置いて店をでることがほとんどであった。サイゼリアも店内の雰囲気、注文の仕方など日本と同じであった。写真4はサイゼリアの料理であるが味は少し辛かったことから中国人の舌に合せているのかなと思った。中国に実際来たからこそ、日本との違いに気づけ、国民性も見えた気がする。

次にこの北京スタディツアーで訪れた場所について述べていきたい。北京に約2週間滞在す



る中でたくさんの場所に行くことができた。天安門、故宮、頤和園、前門、動物園、万里の長城など中国の有名な観光地に行き、多くの出会いもあった。私は歴史学専攻であり、東洋史に力を入れていこうと考えていたところであったので、歴史的な建造物らを見ることでとてもいい刺激となった。特に万里の長城では昔の人々が作った道ということを入念に入れながら歩くことで、ただ観光地として万里の長城を楽しむだけでなく、歴史的観点からも楽しみながら歩くことができた。



万里の長城



天安門

また多くの中国人と関わったことで、自分が考えていた中国人のイメージが変わった。北京に行く前は中国人というと、不親切でマナーが悪いというようなイメージであったが、実際に中国に行くと親切な人が多かった気がする。お店のドアが重すぎて開けられなかったときは中国人のおじさんが押して開けてくれ、道がわからなかったときは尋ねたらちゃんと教えてくれた。このように自分が思っていたよりもすごく優しい人ばかりであった。反日の人を見ることもなく、日本人にとっても親切に接してくれたように思う。日本のメディアで見ると中国の様子はなく、自分で実際に感じたり目にしたりすることで実際の現場の様子を知ることが大切であると考え。



頤和園で出会った中国人のおじさんが書いた文字

このツアーで中国人だけでなく、フランス人や韓国人、ブラジル人、パキスタン人など多くの外国人と国際交流ができたように思う。また中国で出会った多くの友達や先生とコミュニケーションをとることで、中国語をもっと勉強してもっとスムーズに会話ができるようになりたいと思った。この約2週間というすごく短い時間の中で多くの経験ができ、少し視野が広がり、もっと中国のことを知りたいと思った。またあらためて日本の良さを感じることができ、自分が恵まれた環境にいたことを実感した。大学2年生で海外に行き、多くの刺激を受けたことは大切な思い出になったし、価値ある経験ができたと思う。中国で学んだこと、感じたことを忘れずに、大学2年生後期にはもっと多くの外国人との交流を深めていきたい。

## スタディツアーに参加して

B161G221N 松田 美紅

私は8月21日～31日の10日間の間に行われた、中国スタディツアーに参加した。近年では日本へ観光に訪れる中国人観光客も増えており、度々テレビなどでも中国に関する報道が紹介されている。しかし、日本のテレビなどで紹介される中国に関する報道には、実際私自身、あまり良い印象を持ったことがなかった。しかし、日本で報道されていることは、本当にすべてが真実なのか疑問に思った。このことから、私は言語に触れる中で、実際に中国はどのような国なのかを見てみたいと思い今回のスタディツアーに参加した。

まず中国に到着して驚いたのが、交通量が非常に多かったことだ。最初はその多さに圧倒されたが、日本とは違っていて新鮮であった。そして、到着した日にスタディツアー参加者全員で夕食を食べたが、料理の量は非常に多く、日本のレストランでは料理が大皿に盛られていることはあまりないので驚いた。聞くとところによると、中国では大皿に盛られている料理を皆で取り分けるというのが一般的らしく、中国の食事文化を楽しむことができ、賑やかな食事会となった。

22日からは、午前は大学で中国語の授業、午後は課外活動という形で活動をした。課外活動では、大学院の先輩方に中国の様々な名所を案内してもらい、貴重な体験をさせてもらった。その中からいくつか紹介したいと思う。まず、北京の中心に位置している天安門広場である。天安門広場を訪れたときは、北京の中心部ということもあり、多くの外国人観光客で賑わいを見せていた。実際に見てみると、非常に迫力があり、北京の中心部にふさわしい建造物であると感じた。また天安門の東側には国家博物館があり、中国の歴史について学ぶことができる。次に万里の長城についてである。大学から万里の長城まではバスでおよそ3時間かかるが、バスの中からは賑やかな都心の町並みから落ち着いた山道へと移ってゆく景色を眺めることができた。万里の長城の麓に到着すると、空気は都心よりも澄んでおり、麓からでも十分万里の長城を見ることができた。山を登り万里の長城に辿り着くと壮大な景色が広がっており、非常に美しかった。

今回のスタディツアーで初めて中国を訪れたが、実際に行ってみると、日本ではまだ知られていない中国の良いところを発見することができた。日本で学ぶよりも多くの事柄を学ぶことができ、非常に貴重な体験をすることができたと思う。

## 北京スタディツアーを終えて

人文社会科学部国際社会コース2年

B161G029T 上原 佳那

### ○はじめに

私は今回のスタディツアーで初めて海外に行った。日本とは違う文化や生活様式を経験し、感じたことをまとめたい。

### ○考 察

#### 1. トイレ事情

中国のトイレは日本のトイレとは違い、トイレットペーパーを流さずゴミ箱に捨てる。そのため、トイレ周辺で異臭を感じることもある。また、トイレットペーパーは個室に備え付けられていないことが多い。個室の前に設備されているトイレットペーパーを使う分だけ切り取るか、持参しなくてはならない。

#### 2. お冷ではなくお湯

中国人は冷たい飲み物よりも温かい飲み物を好む。レストランではお湯が出され、カフェのアイスドリンクは氷が入ってない温い飲み物を渡される。日本の感覚で飲み物を注文せずに、「氷を入れてください」と言わなければ冷たい飲み物は出されないことを注意したい。

#### 3. 交通事情

中国は日本と違い、右側通行だ。信号機を無視する車や歩行者が多いため、道路を渡る際は気を付けなければならない。ドライバーや自転車に乗っている人は、自分が先に進むという意味や危険を知らせるためにクラクションやベルを鳴らす。そのため、夜でも道路は騒がしい。最近では町中に誰もが使える自転車が主流になっているようだ。無料で使えるものもあるようだが、大抵のものは微信で支払いをすると使える。1円で利用できるのも、所有の自転車を買うより安くすむらしい。

バスは2円で広い範囲に行くことができる。乗車時に支払うので、不正がないか係がチェックしている。バスは突然路線を変更することがある。どこに行くバスなのかを係に聞いて乗ることが無難だ。運転は荒いため、酔い止めを準備していた方がいい。

地下鉄や電車の値段も安い。日本では切符を購入するが、中国ではカードを購入する。車内で電話する人は多い。鞆の中に犬を入れて乗車している人を見たときは衝撃を受けた。

#### 4. 万里の長城

万里の長城は徒歩で全てを歩いていくのかと思ったが、階段で整備された山道を1時間弱進むとすぐに万里の長城に出た。私が歩いた場所は万里の長城の途中地点で、入り口には休憩場の出店があった。万里の長城から見える景色は、自分の上には空しくなく空気が澄んでいてとても気持ちよかった。

#### 5. 五道営胡同

休日に友人と3人で五道営胡同という、日本でいう渋谷のようなところへ行った。昔ながらの街並みにお洒落なカフェなどが融合されていた。建物ひとつ一つに番地が大きく書かれていたので、店を探しやすかった。中国にあるファストフード店を体験しようということで、

ケンタッキー・フライド・チキンを食べた。メニューはチキンよりもハンバーガー系が多かった。私は北京ダックのハンバーガーを食べた。味付けは辛めだが、美味しかった。

## ○おわりに

今回のスタディツアーで今までの中国のイメージを払拭できた。トイレ事情は日本が快適すぎるのではないかと思った。ニーハオトイレを利用できるくらいになると、トイレ問題も気にならないだろう。共有できる自転車は環境にも家計にも優しいので、日本も導入してほしい。

中国人は優しい人が多い。道を聞くと、拙い中国語でも聞き取り丁寧に教えてくれる。そのような中国の文化をもっと知りたいと感じたので、留学に挑戦したい。



↑ 氷がない温い飲み物



↑ 地下鉄の入り口とカード



← 万里の長城の景色



↑ 鳥の巣公園



↑ 売られているお菓子のおき方が芸術的

## 中国スタディーツアーに参加して

人文社会科学部人文社会化学科人文科学コース2年

B161G101K 斎藤 香織

私がこのツアーに参加した理由は、外国に行ってみたかったというのも一つあるが、一番はTVやネットの情報によって偏見を持ち、中国や中国人を嫌っている身近な人に対して、必ずしもそのイメージが正しいわけではないと伝えたい思いがあったからである。私は大学のこれまでの中国関連の授業から、中国というのはメディアが報じかつ私もそう感じているような危ない遅れた国ではないのではないか、そのイメージには誤解があるのではないかという思いを持った。そうして実際にどのような国なのか自分の目で見て確かめたいと思っていた。実際に、ツアーの報告をしたところ「思っていたよりきれい」「意外とごみごみしていない」「都会」「近代的」などの感想を持ってもらうことができ、少しは以前よりも良い印象を持ってもらえたようなので、自分にとっても身近な人への働きかけという点でも、目的はある程度達成されたと思っている。

ここからは、中国におけるコミュニケーションについて学んだことを述べる。

まず、自分から働きかけるという点については、パナソニックの社員の方の経験談を聞いて以来、自由行動の際は「生き延びられればいい(から多少の恥や失敗はしてもいい)」という姿勢で道を尋ねたり買い物をしたりなどの行為に挑戦してきた。言葉が不自由なので道行く人やお店の人には少々迷惑をかけたが、意外となんとか解決できることを実感できた。度胸が付き、日本に帰ってからも以前より怖気づかずに知らない人と話せるようになった。

中国語に関しては、この一年半学んできたことを試してみようと思って意気込んで行ったのだが、結局使いこなせた言葉は「谢谢」「对不起」「这个」「我是日本人(道を聞かれたり絡まれたりした時に断る言葉)」くらいのもので、あとは名詞や動詞を並べたり、空気を読んで読んでみたり首を振ってみたりとその程度のことしかできなかったのは残念であった。それでも、死なずに生活することはギリギリできそうだということは分かった。中国人の中国語は個人の癖が強いようで、簡単な文章でも聞き取れないことがよくあった。聞き取れない場合は、行動を共にする仲間の勘に助けられて乗り越えることができた。

どうしても読みが分からないときや、文法がよく分からないときは筆談や電子辞書を指さすことで伝わったが、「筆談ならできますが、聞き取ったり話したりすることはできません」ということまでは伝わらなかったり(漢字を使いこなせる国がほとんどないことを考えれば当然である)、「请写」と言う前に容赦のない速さの中国語が返ってきて手詰まりになることが多かった。結局、筆談に持ち込めることは稀で(筆談に持ち込めた場合、大体の意味がお互いに分かるのだからやはり漢字は偉大である)、コミュニケーションの基本は話すことと聞くことなのだと改めて思い知らされた。

次は中国と日本という関係について感じたことを述べる。

日本へ観光に来る中国人のマナーが悪いというのは前から言われていたことだが、中国には中国の常識や理屈があり、おそらく中国人観光客はそれに沿って動いているだけなのだろうと思った。外国人の知りようのないその国の常識から外れてしまえばマナーがなくなっているということになるのだが、どの国の人でも特に初めてその国に行った場合にはそうなるのは仕方

のないことだろうと感じた。

また、「長安は国際都市だった」という授業があったが、今回訪れた北京においても国際都市の印象を受けた。様々な人種の人々が道を行き交い、大通りには多国籍の料理店が並び、スーパーの品物や雑貨・化粧品などの商品も東西問わず様々な国の商品が入り乱れていた。中国は昔からこのような感じで、緩く広く当たり前のように外国の文化を受け入れてきたのだろうという感じがした。

関連して、日本ではよく中国の過激な反日デモの様子が伝えられるが、日本が極端に嫌われているという印象は全く持たなかった。日本人だと言えば「ああ日本ね」くらいの反応であり、観光地のファーストフードの中に日本風のお店が混じっていたりすることからも、中国の街中においての日本はその他の国々の中の一つという程度の位置付けなのではないかと思えた。商品に関しては、日本とほぼ変わらないパッケージで並んでいる商品やおかしな日本語で書かれた看板などが見受けられ、日本という国の商品には少なからずブランドがあるようであった。その様子を見て「日本ってやっぱりすごい」などという自賛の感情ではなく、ただ素直に嬉しいと感じた。

最後に、これからのことについて考えたことを述べる。

私(達)は中国人もしくは韓国人に見えるらしく、よく話しかけられ、道を聞かれた(と考えられる)ことも一度や二度ではなかった。自分は中国語の力を試すには非常に恵まれている容姿をしているのだと感じた。中国語や中国人や文化にもっと触れて慣れて、いずれまた中国を旅行したいと思う。その時には今回難易度が高いと思って入れなかった場所や飲食店にも入り、お客に対して雑談を吹っかけてくる店員や暇そうな人との聊天儿に挑戦したいと思った。その際、友人などを連れていき、中国の街の面白さを紹介できればより良いと思う。

また、今回は、案内や煩雑な両替などに付き合ってくださった大学院生がとても頼もしく思えた。外国語を使いこなせるということは、自分が外国へ行くときだけでなく、自分の国にやってきた外国人を大いに助け楽しませることができるようになるのだと分かった。このツアーによって外国語の学習をする意義をより感じられるようになり、ここでの経験は、これからの学習のやる気の源となると思う。

## スタディツアーに参加して

b171g422h 大塚 彩紀

今回私はスタディーツアーに参加し、人生で初めて海外へ行きました。私は今まで日本から出たことがなかったため、中国の料理や看板など見るもののほとんどに対して目新しく感じ、道路や建物の規模の大きさに圧倒されていました。

滞在中の一日のながれは、午前中は中国語の授業を受け午後は自由に使ってよいというものでした。食事は各自でとるため、私は同室の人と一緒に飲食店へ行き肉まんや麺、粥を食べたり、スーパーで果物や日本ではあまり出会わないようなものを買ったりしていました。はじめの何日かは食べ物の油っこさになじむことができず、つらいと思っていましたがやがて慣れました。午前中の中国語の授業は楽しかったです。多くの単語を教わりました。その中で私が難しいと思ったのは中国語の発音です。私は先生から発音を訂正されることがよくありました。しかし先生が教えてくれる正しい発音と、自分の間違った発音の違いが分かりませんでした。発音が違うために全く違う単語になってしまい、なかなか伝わらないことがありました。この体験によってこれからの中国語の学習への意識が変わりました。これからは単語や文章のピン音表記だけでなく、声に出すとどのような音になるのかをCDを使って確かめていきたいと思います。それができないと、単語やその読みを知っているにもかかわらず表現できないため伝わらないということが起こると考えられます。午後は日本語を専攻している中国の大学院生さんらが私たち一行を中国の名所や北京の街に連れて行ってくれました。学生さんたちに案内してもらった場所は、万里の長城や天安門をはじめ商店街や宿舎近くのデパートに及びます。帰りには夕飯時になるため学生さんおすすめの飲食店で中国料理を食べました。その間私たちは学生さんたちとたくさんおしゃべりをしていました。学生さんらは日本語を五年間学んでいるようで、とても上手でした。私たちはずっと日本語で会話をしました。学生さんたちからは昔の中国の詩人や建物、歴史についてや中国の現状や流行などを教えてもらいました。聞かれたことは日本の制度についてや風習、特に言葉のことが多かったです。彼女たちと話すことで中国のことはもちろん、改めて日本のことを知ることもできました。具体的に印象深いのは日本語の表現のことについてです。例えば“おいしい”という語の場合、たいてい“食べ物の味が好ましい”というような意味で使われます。しかし一方では“おいしい話”というように“いい思いをする、都合がいい”というような意味で“おいしい”という単語が使われることがあります。このように単語がたまに本来の意味から外れて用いられるところが、日本語を学ぶ上で難しいところだと話していました。これが学生さんから指摘されてはっと気が付いたことです。確かに面白い表現だなと思いました。他の言葉を母国語とする人が日本語に対してどう考えるのかを知り、そのようなとらえ方があるのだと興味深かったです。このことに限らず、中国の年中行事とその飾りについてや、行った場所にまつわることがらについても話してくれました。例えば、お土産店で切り絵が売ってあるのを見ていると、中国の正月である春節のときには窓に切り絵を貼って福が来るように願う慣習があること、またその切り絵には縁起の良い模様が描かれることを紹介してくれました。はっきりと覚えていませんがほかにも、建物のつくりや用途、昔の人々の暮らし、昔身分によって定められていたきまりなど色々なことを教わりました。その知識の量には目を見張るものがありました。私の場合、外国人に日本の慣習、

建造物、昔の人の風習について説明できる自信がありません。中国のことを知ったら、反対に日本のことについても知りたくなりました。これからは知らないことや分からないことに出会ったら忘れないうちに調べるようにし、自分の知識を増やしていこうと思います。自分がものをよく知らないことに気が付くことができて良かったです。中国のこと、日本のこと、さらには自分のことまで知ることができました。スタディツアー内の活動の中で学生さんたちとの交流は、私にとって最も価値のあるものでした。

中国へ行って一番驚いたのは国土の広さでした。土地や空間を広々と使った建物や道路が多く、感動しました。二番目に驚いたことはお金のありかたです。中国ではほとんどの支払いにスマートフォンが用いられ、現金を使うことは少ないようでした。とある店での支払いの際、私たちが現金を使っていたのでレジのおじさんは困ったような顔をし、偽札かどうかを確かめていました。そのぐらいスマートフォンを用いた支払い方法が浸透しているのだと思います。

私はこのツアーに参加して良かったと思っています。中国語の能力が上達したかどうかは分かりませんが、学んだことはたくさんありました。行く前は中国についての情報が少なく、どんなところなのかよく分かりませんでした。しかし実際にその場所へ行き、北京の街の様子、人のやさしさがはっきり分かった気がします。自分の目で確かめることの大切さを知りました。気になることはやってみるべきだと思います。



春節の時に飾られる切り絵の一例 左上に福の字らしきものが見える



## スタディーツアーに参加して

B161G104Y 坂本 萌

私が今回の中国スタディーツアーへの参加が人生で初めての海外でした。そこで、文化や生活スタイルの違いや、異国で生活する人々との交流を通じて考えたことが主に3つあります。

1つ目は、中国という国、また中国人に対して、日本人は間違った解釈をしているということです。中国に対して多くの日本人は、「中国は危険だ」「中国人はマナーがっていない」「中国人は反日的である」といったような偏見を持っています。実際に私の周りでもそういった考えを持っている人が多く、今回のスタディーツアーへの参加も家族・友人をはじめ、多くの人に心配されていました。そして私自身も、実際に中国に行くまではなんとなく「中国は危ない」という偏見を持っていました。

しかし、いざ生活してみると中国は危なくも、日本人に厳しくもありませんでした。むしろ、日本よりも日本人にやさしいという印象を受けました。北京語言大学の学生・教職員の方々、寮の売店のおばさん、レストランの店員さん、飛行機のキャビンアテンダントさん、出会ったほとんどの中国人が何もわからない私たちに気さくに明るく話しかけてくれました。こういった方々と接して、今まで中国に対して偏見を持っていたことを申し訳なく思いました。そして同時に、私のように実際に「中国」という国に触れることで、日本人の中国人に対しての偏見が少しでもなくなっていけばいいなと感じました。

2つ目は、「一期一会」という言葉の実感です。このスタディーツアーの期間中、様々な出会いがありました。私たちをずっとサポートしてくれていた北京語言大学の学生さん3人や別先生はもちろんですが、同じ寮で生活していた韓国人の留学生と仲良くなれたり、観光地などで出会ったフランス人とブラジル人の観光客の方々と一緒に写真を撮ったり、偶然会った日本人の方と日本語で話をしたりと、中国人以外にも様々な国のの人々と交流ができたことには驚きました。中国という国で、中国人以外の人と出会えるということは、とても新鮮でした。自国でない国にいるからこそ、この人とはこれ以降もう一生会うことがないかもしれないということをいつも以上に実感しました。だからこそ、ひとつひとつの出会いと交流を大切にこれからも過ごしていきたいと感じました。

3つ目は、私が今回最も強く感じたことです。笑顔の大切さです。私は今回のスタディーツアーで、できる限り中国語を使ってみることと、交流するすべての人々に笑顔で接するということの2つを心掛けていました。そうすると、例えばはじめは少し怖いなと感じていた店員さんも、私が「謝謝」と笑顔で言うと、とても感じよく笑顔を返してくれました。このような経験を何度もして、言葉は通じなくても笑顔を向けることで、感謝の気持ちや友好的である意思を十分伝えることができると強く感じました。笑顔は言語と違い世界共通です。人とコミュニケーションをするうえで、言語で足りない部分を笑顔で補うことで、より円滑に、そして楽しく他者と接することができると思います。私はこれからも、「いつも笑顔で」を心掛けて、様々な人と積極的に交流したいと思いました。

以上の3点が、私が中国でのスタディーツアーで感じたことです。今回のスタディーツアーでは、中国語の勉強はもちろんですが、同大学学生との交流の場があったり、寮で生活することによって留学生の生活を体感できたり、有名な観光地に行ったりと、様々な活動が用意されており、とても充実していました。この経験をもとに、中国の文化やライフスタイルについて興味が出てきたので、これからより深く勉強していきたいと思います。また、中国に対しての偏見がなくなるよう、今回の経験を通じて感じた中国の良さを、自分の周りのいろいろな人に発信していきたいと思います。



## スタディツアーに参加して

農林海洋科学部 B174N072X 本郷 真子

このツアーに参加してよかったと思う点は三つある。まず一つ目は、北京の観光地にたくさん行くことができたということだ。いつも午後になるとチューターさんがいろいろな場所に連れて行ってくれたし、何度か自分たちだけで行った場所もある。いろいろ訪れた中でも一番印象に残っているのは、万里の長城だ。長城に着いた時、尾根に沿って続く長城の石畳を見て感動したのを覚えている。そこからの景色は本当に美しくて壮大で、こんなに巨大な建造物を大昔の人々が造ったとは信じられなかった。その他にも故宮や頤和園といったところも、中国らしい建物の形や色合いが興味深かったし、どこへ行っても見ていて飽きなかった。

二つ目は、自分の中国に対する考え方が大きく変わったということだ。ツアー前、中国は汚染がひどく治安の悪い遅れた国で自己中な人たちばかりだと、マイナスなイメージがあった。しかし実際には汚染はそこまでひどくはないし、パナソニックチャイナの方がおっしゃっていた通り発展がめざましく、日々進んでいる国だと言える。また人柄も、お年寄りと子供にやさしく、日本人よりも親切だと思った。自分が持っていた中国のイメージは日本のメディアを通して知りえた情報であり、他人に聞いたものである。「百聞は一見に如かず」ということわざがある通り自分で見て聞いて、知ったことや思ったことこそが自分の中で一番大切な情報となるのだと感じた。

そして三つ目は、一緒にスタディツアーに参加した高知大学の皆さんからも刺激を受け、新しい発見があったということだ。まず一つに、毎日のように外出する先輩方を見習って毎日いろいろなところへ出かけた。毎日へとへとだったが、その分中国にいる間は濃い時間を過ごせたと毎日楽しかった。今しかない時間を存分に使って楽しむことで充実した日々を過ごせるのだと知ることができた。二つ目に、自由行動の際に自分の意見をしっかり伝えられる人がいた。彼女が自分の意見をしっかりと伝えたことでみんながスムーズに行動することができた。話をてきぱき進めていくには良い意見を待つのではなく自分が意見を持ち、さらに相手にわかりやすく伝えることが大切なのだと知ることができた。

この12日間で学んだこれらのことをこれから確実に活かしていきたい。そのためにも今まで以上に学ぶ機会を増やし、自身の学びをより深いものにしていこうと私は考える。

## 「国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ」実施報告

人文社会科学部人文社会科学科人文科学コース

川本 真浩

### ◇ 概要

- \*科目名：国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ
  - \*副題：「ローンボウルズと街並みをとおして探究する香港とマカオの歴史と文化」
  - \*担当教員：川本真浩（人文科学コース）
  - \*実習地：中華人民共和国香港特別行政区および同マカオ特別行政区
  - \*該当プログラム：総合文化プログラム、アジア・オセアニア地域プログラム
  - \*時期：2017（平成29）年12月から2018（同30）年3月まで（事前学習を含む）
  - \*スケジュール
- 10月～11月 受講生募集のための説明会
- 12月～2月 事前学習会（講義、事前学習報告と助言・指導；ローンボウルズ実技練習）
- 2月27日～3月5日 現地実習（高知発／関西空港着）
- 2/27 高知駅（集合）を出発し、関西空港着（移動／前泊）
  - 2/28 関西空港を出発し、香港着；オリエンテーション；見学① 香港島北部
  - 3/1 見学② 九龍半島南部
  - 3/2 見学③ 香港島北部；ローンボウルズ実技講習
  - 3/3 見学④ マカオ
  - 3/4 見学⑤ 新界、香港島北部
  - 3/5 香港を出発し、関西空港着、解散
- 3月（帰国後）レポート作成（助言と指導を含む）と提出

### ◇授業の趣旨

ローンボウルズは、イギリス及びコモンウェルス（英連邦）諸国を中心に世界各地でおこなわれているスポーツである。そのルーツを16世紀のイギリスにたどることができるローンボウルズは、19世紀半ば以降イギリスの「ソフトパワー」（そのひとつとして、文化的影響力）がグローバルに波及するなかで、植民地をはじめとする世界各地に広まった。しかし、その伝播のありようは必ずしも一様ではなく、受け手／担い手の文化的特性や各地の社会構造などにより、さまざまな受容／排除／変容／無関心のありかたがみてとれる。

当授業では、アジア及びヨーロッパの文化と近現代史の基礎を学びつつ、ローンボウルズの実技練習をおこなったうえで、このイギリス伝来のスポーツが現在もさかんにおこなわれている香港を訪ねて、ローンボウルズを通じて現地の人びとと交流しながら、同地の歴史的特性と多文化社会のありようを体感させる。また、香港に隣接する、もうひとつの旧（ポルトガル領）植民地であるマカオを訪ね、香港と同様にアジア世界とヨーロッパ世界の交差点としての同地にも視野を広げることにより、地域とグローバル社会についてより深く学び、調査し、考えさせるとともに、次の「学びのステップ」に進む手がかりを受講学生につかませることを目指す。

#### ◇履修にかかる留意点（受講希望者への注意喚起を含む）

- ・対象は主に1～2年次の学生、受講者数は5名を上限とする。
- ・受講希望者が5名を越える場合は、受講希望理由書（体裁・内容等については説明会で周知する）及び担当教員との個別面接によって受講者を決定する。
- ・受講者は、事前学習（原則として欠席は認めない）と現地実習を確実にこなす実践力と、英語文献を読んだり日常会話をしたりするための英語力、またはそうした英語力を修得するために努力を惜しまない、積極的な姿勢が求められる。
- ・事前学習をとおして実習の遂行に支障があると担当教員によって判断される場合は、現地実習への参加を許可しないことがある。
- ・旅程の詳細については事前学習会等を通じて参加希望学生と相談しながら確定させる。
- ・当授業では現地実習期間をやや短めに設定して経済的負担等を軽減することにより、他の国際社会実習（10日間以上）には参加しづらい学生に対しても門戸を開くことをとくに意識する。この点は上記のような受講者決定がおこなわれる際にも考慮に入れる。

#### ◇本年度授業実施にかかる補足説明

当初、国際社会コース（国際社会コミュニケーション学科）は「受講生が3名に満たない場合はこの科目は開講しない」という条件を設けていた。事前説明会などで呼びかけたところ受講希望者が2名しかなかった。しかしながら、担当教員の体制や内容、実施予算の見込みなどを再検討したところ、計画の一部を変更すれば開講できる見通しがついたので、一部を修正した授業計画案を同コース留学・実習委員会に提出し、審議・承認をうけた。上記の受講希望者には変更点について説明したうえであらためて受講の意思を確認するとともに、変更後の授業内容については同コース掲示板でも告知した。結果的に当初の希望者2名がそのまま受講した。

##### （主な変更点）

- ・担当教員：高橋俊（国際社会コース）と川本真浩（人文科学コース）の2名引率から後者1名のみ引率に変更。（※実施経費の項も参照）
- ・実習地：香港と深圳にて実習を行う計画であったところ、深圳の文化を研究する高橋が同行しないことになったために同地の訪問・実習をとりやめ、西洋史を専門領域とする川本が指導可能なマカオの訪問・実習に置き換えた。

#### ◇実施経費（教員）：6泊7日（前日泊／帰国後の高知帰任までの旅費を含む）170千円

（内訳）高知—関空（鉄道賃、日当、宿泊費等）24千円、関空—香港（パック利用）105千円、日当（現地交通費等雑支出を含む）41千円）

※すべて機能強化促進経費（年度計画実施分「海外フィールド実習」）による支出

※学生費用（往路は高知発／復路は関西空港着まで）：6泊7日116千円

#### ◇その他（開講準備に際しての留意点）

香港でのローンボウルズ・クラブの見学、調査、施設利用、競技者との交流については、香港ローンボウルズ協会（Hong Kong Lawn Bowls Association；以下「HK LBA」と略記）にクラブへの連絡等、サポートを依頼した。同協会には、前年度授業とほぼ同内容の見学およ

び施設利用の便宜をはかっていただいた。

#### ◇実施内容

(1) 事前学習（朝倉キャンパスほか：12/11, 12/15, 12/26, 1/12, 1/16, 1/26, 1/31, 2/8）

まず、香港及びマカオの基本情報としての現況概要とともに、両地の歴史（とりわけ西洋諸勢力の到来直前から中国返還までの近世・近現代史）について講義した。とくに香港の現状と現代文化に関する知見は高橋俊教授の講義と助言によるところが大きかった。また、受講生自身が、それぞれの関心に即して両地に関する情報を収集、整理し、現地実習において焦点をあわせるトピックの練り上げと訪問の下準備をおこなった。さらに、北体育館での練習及び県内外ローンボウルズ愛好者との交流会により、ローンボウルズの基本的なルールと実技の基礎を習得した。

(2) 現地実習（高知～関西経由～香港・マカオ～関西空港にて解散：2/27～3/5）

#### 2月27日（火）

高知から関西空港へ移動（前泊）：出発前の確認セッション（実習内容や受講生各人が定めた実習テーマについて；旅行上の注意事項など）

#### 2月28日（水）

関西空港から香港へ移動：鉄道で香港島中心部へ移動し、銅鑼湾地区にある宿（ホテル）にチェックイン。休憩後、宿の周辺を散策してから、最初の訪問先である香港フットボールクラブ（以下「HKFC」と略記）に向かう。同クラブメンバーでローンボウルズ部門長であるジョニー・ツァン氏ご夫妻の案内でクラブ施設を見学する。クラブ内で軽食をとりながら、明日以降の行程について最終打ち合わせをおこなう。そのあと、トラムでヴィクトリア公園に行き、園内の公営ローンボウルズ場で行なわれているHKLBA主催の若手競技者練習会を見学する。そこで、練習に参加していた女子生徒（日本でいう中学・高校生相当）と受講生が自由に質問しあい話しあう機会も得られた。練習を少し見学した後、トラムで宿に戻り、振り返りセッション（今日の実習内容の確認・反省と明日以降の打ち合わせ等）をおこなった。

#### 3月1日（木）

宿を出発、トラム、フェリー、地下鉄を乗り継いで、黄大仙洞（寺院）に着く。旧正月の装い、参拝者、占い所などを見学。地下鉄で尖沙咀に戻り、昼食後に香港歴史博物館を見学する。そのあと九龍ボウリンググリーンクラブ（香港最古のローンボウルズクラブ）にて、HKFCのツァン氏やHKLBA会長ヴィンセント・チャン氏をはじめとするローンボウルズ関係者と面談し、施設内を見学しながら香港のローンボウルズ史について説明を受ける。つづいて周辺にあるクラブ3か所（九龍クリケットクラブ、三軍倶楽部、クラブ・デ・レクレイオ）を徒歩で見学して回る。地下鉄で宿に戻り、夕食をとったあと、振り返りセッションをおこなった。

#### 3月2日（金）

宿を出発、セントジョーンズ大聖堂（イングランド国教会系；堂内のチャペルは日本軍との戦

いで亡くなったイギリス兵の供養所）を見学したあと、ケーブルカーでヴィクトリア・ピークに登る。下山してツァン氏と会い、インディアン・レクリエーション・クラブの見学と同所レストランでの昼食。そのあと紀律人員体育及康楽会（Disciplined Services Sports and Recreation Club：警察官、刑務官、消防士などの公務に就く者とその退職者のスポーツクラブ）やクライゲンガウアー・クリケット・クラブ（ローンボウルズを含む会員制スポーツクラブ）を経由して、香港フットボールクラブに着き、屋内グリーンでローンボウルズ実技指導を受ける。クラブ近くの上海料理店でツァン氏夫妻とともに夕食をとったあと、生鮮食料品マーケットを見学しながら、宿に戻った。

### 3月3日（土）

宿を出発、地下鉄で上環、高速艇でマカオに到着。マカオ半島内はすべて路線バスで移動した。依然として至る所に旧正月装飾がみられた。セナド広場、民政総署、聖ドミニコ教会、聖パウロ教会跡をたどり、マカオ博物館では歴史展示を中心に見学した。海鮮料理の昼食後、ドンペドロ5世劇場と聖ヨセフ修道院（フランシスコ・ザビエルの遺骨）の見学、そしてバスでバラに移動して媽閣廟を訪ねる。さらにバスでマカオ市街を縦断して北上し、特別行政区の境界近くまで移動する。街並みや人の様子について旧跡とホテルやカジノが密集する半島南部との相違点を確認しつつ、林則徐記念館を見学する。再び、半島南部に戻り、高速艇で上環に帰着。夕食をとりながら振り返りセッションをおこなう。地下鉄で宿に戻った。

### 3月4日（日）

宿を出発、地下鉄で九龍半島に移動し、新界にある香港文化博物館を訪問・見学する。天候が良くなかったこともあり、予定していた新界の史蹟巡りを断念し、九龍に戻って昼食をとる。午後は、受講生の関心にそって、香港共同墓地と灣仔マーケット（市）を見学する。銅鑼灣駅の北方にある雲南料理店で夕食をとったあと、宿に戻って振り返りセッションをおこなった。

### 3月5日（火）

宿を出発して、タクシー、鉄道を乗り継いで香港国際空港に着く。ほぼ定時運行で関西空港に着き、解散した。

## ◇実習の成果

受講生各自が定めたテーマにそって事前学習及び現地実習で得られた知見を基に、最終レポートを作成・提出できた。その成果は、この報告書に掲載されたレポート（英文アブストラクトを含む）ならびに国際社会コース海外実習報告会で発表された。

## 《現地実習に関する特記事項》

- (1) 街並みを眺めながらマーケットなどを訪ねるとともに、博物館、宗教施設、飲食施設、スポーツ施設など香港及びマカオの歴史と文化にかかる多様な事物を目にし、訪ね、さまざまな知見を得る機会を設けることができた。とくに異なる宗主国によって異なる性格の植民地支配を受けた香港とマカオを対比する視点が、東アジアとヨーロッパの交差点を複眼的にとらえるための重要な契機となった。また、植民地時代に宗主国から伝えられ、現在に至るま

で香港スポーツ文化の重要な一角をなすローンボウルズ関連施設（歴史的建造物ないし会員限定施設を含む）をHKLB Aの協力をえて、案内付きで見学し、実技指導を受けることができたことも貴重な機会となった。

- (2) 現地での移動の大半を徒歩と公共交通機関によったことで、地理的に限られた範囲ではあるが、現地の人びとの日常生活圏を身近に観察することができた。
- (3) わずかな時間ではあったが、受講生よりやや若い年齢（10歳代前半）の女子ローンボウルズ競技者との対話により、いわゆる「大学における学生間交流」では接することがない（＝大学生ではない）現地の同世代人と接する機会を得た。

#### ◇反省点と今後の課題

- (1) 前年度同様、今回の実習でもHKLB AならびにHKFCの協力と支援が欠かせない要素であった。とくに、HKLB A会長チャン氏による各クラブ施設見学の手配、案内・解説、そしてHKFCローンボウルズ部門長ツァン氏夫妻による自他クラブ施設及び近隣地域の案内と食事会の開催などは、授業実施に欠かせないものであった。その他のローンボウルズ関係者にもさまざまな協力と支援をいただいた。ここに記して謝意を表したい。ただ、このような協力・支援態勢はあくまで先方のボランティアな厚意に拠るところが大きいこと、また人文社会科学部の地域貢献・国際交流活動の一角をなすべく継続的かつ組織的な交流活動をおこなっていくことが肝要であることなどを考えると、たとえば学部と当該競技団体等との間でなんらかのそうした活動にかかる協定を結んだうえで授業を展開していくのが理想的な形であるとも考えられる。
- (2) 受講希望者が少なかったために当初の計画を一部変更して授業を実施することになったことについて、その適否を検証する必要がある。今回は、担当教員による計画変更とそれをうけた留学・実習委員会の承認そして実施予算の見通しがついたために、いわば例外的に開講が認められた。授業内容や実際の実習実施の面で何らかの具体的な問題が生じたわけではないが、今後、同様のケースが生じた場合の対応を視野に入れて、今回の事例を検証しておいたほうがよいと考える。
- (3) 前年度の香港スタディツアーは事前説明会や問合せに来た者全員（5名）が実際に受講したのに対し、今回のスタディツアーは事前説明会や問合せの段階で10数名が関心を示したにもかかわらず、実際に受講したのは2名であった。ちなみに、同時期に事前説明会をおこなったオーストラリアへのスタディツアーも4名ほど問い合わせがあったが実際の受講希望者は無かった。「事前説明会の敷居が低い」ことを積極的に評価することもできるが、他方で説明等を受けながら実際には受講しなかった学生の事情（理由）を知りうる何らかの機会があればなおよいとも考える。



## 私がみた香港・マカオ

B171G269S 国際社会コース

藤石さあや

### はじめに

今回、私は実習で香港とマカオを訪れた。参加を申し込んだ頃は両地域についての知識も乏しかったが、事前学習をとおして植民地時代の名残と食文化に興味を持つようになった。これらに関心を持った理由は、前者：植民地支配をした歴史はあってもされた歴史のない日本に生まれたからこそ、支配を受けた歴史を持つ地域の今を知りたいと考えたため、後者：食文化をとおして彼らの暮らしに触れてみたいと思ったためである。

### 植民地時代の名残

香港はイギリス、マカオはポルトガルに支配されていた歴史があると学んだとおり、現地に着くと標識や看板が広東語の他にそれぞれ英語、ポルトガル語で書かれていた。香港ではイギリス由来の2階建てバスも多く走っていて、これだけ分かりやすい形で名残をとどめているのは興味深かった。

ここで言語について少し補足しておく。今回の実習でお世話になったジョニーさん夫妻やクラブでお会いした方々は私たちに英語で様々な説明をしてくださったが、地元の人同士では専ら広東語で会話をしていた。今回立ち寄った香港の飲食店のなかに簡単な英語も通じなかった店があったことを考えると、やはり彼らの生活に密着しているのは英語よりも広東語であるといえるだろう。マカオも同様に、短い滞在時間だったこともあるだろうが聞こえてきたのは大半が広東語であったように思われる。言語における植民地時代の名残として香港は英語、マカオはポルトガル語、と一口に言っても、実際のところ日常的に使用されているのはどちらの国も広東語だったということを今回現地に出向いたからこそ体感できた。

### 1. ローンボウルズ

香港ではジョニーさんの案内のもと香港フットボールクラブや九龍ボウリンググリーンクラブをはじめ多くのクラブを見学したが、老若男女問わず幅広い年代の人がローンボウルズを楽しんでいた。本スポーツは日本ではまだまだ知名度は低いが、ヴィクトリア公園のローンボウルズ場で行われていた青少年ボウラー（競技志向）を対象とする練習会に参加していた女子学生の「激しいスポーツではないから気軽にできる」という言葉どおり、あまりプレイヤーを選ばないスポーツであるという点は大きな魅力ではないだろうか。そもそもローンボウルズはイギリスにおいて長い歴史を持ち、現在もイギリス及びコモンウェルス諸国を中心に世界各地で行われているスポーツである<sup>1</sup>。そうしたイギリスと深い関わりのある競技が香港で行われていることは、帝国をつうじた文化伝搬のひとつの証拠であり植民地時代の名残であるといえる。

### 2. マカオの歴史

マカオというと、現地に赴くまでは煌びやかなカジノのイメージが先行したが、その歴史的建造物の数に驚かされた。2005年、世界遺産に登録された「マカオ歴史市街地区」には22の

歴史的建造物と8つもの広場があり<sup>2</sup>、徒歩で移動できる範囲以内にいくつも位置しているので、今回の実習の限られた時間の中でも聖ポール天主堂跡、聖ドミニコ教会、ドン・ペドロ5世劇場、聖ヨセフ神学院及び聖堂など多くの場所を見学することができた。ドン・ペドロ5世劇場は当時マカオに住むポルトガル人にとって重要な社交の場であったという歴史<sup>3</sup>や、民生総署ビルはかつてポルトガル政府のマカオ行政当局として使用されていた<sup>4</sup>ことなどから、歴史的にもマカオとポルトガルの確かな繋がりを感じた。

## 食文化

### 1. 美食の街・香港

美食の街として知られる香港には「食得係福」(食べることは福に繋がる)という考えが存在し、加えて「医食同源」を基本として普段の食事から身体を労わる習慣がある<sup>5</sup>ということからも、香港人の食に対する意識の高さが窺える。香港では、広東料理、北京料理、上海料理、その他の地方料理など様々な中国料理を楽しむことができ、このうち最も割合の大きいものはやはり広東料理で、全体の8割程度を占める<sup>6</sup>。

#### I 飲茶とアフタヌーンティー

香港はお茶を楽しみながら点心をつまむ飲茶の本場としても有名だが、昼に楽しめることが多く、夜の飲茶は珍しいとされる<sup>7</sup>。料理店で出される点心料理は150種類、広義のものも含めると2000種類にも及ぶ<sup>8</sup>というから驚きである。その昼と夜の間に楽しむことができるのがアフタヌーンティーである。19世紀、イギリスの貴族階級から広まったとされるアフタヌーンティーを提供する店が香港には多く存在する。ここでもまた、香港がイギリスの植民地だった時代の名残を確認できる。お茶を楽しむという点では飲茶と共通しているが、どちらか一方が残るといった形ではなく両者とも現在まで楽しまれているというのがまた面白い。

#### II 「古き良き」文化

ただ、最近は注文した品を店員が持って来るといった普通のレストランのような店が主流になり、昔ながらのワゴン式の店が少なくなっているようだ。今回、店を訪れたものの、貸し切り利用があって満員で利用できなかった店「名都酒樓」も貴重なワゴン式の飲茶が楽しめる店の1つだったので体験できず残念だが、次の機会があれば是非訪れたい。そこで私がかいま見た限り、100人は優に収容できそうな広い大ホールに沢山のテーブルがあり、蒸籠が乗ったワゴンが運ばれてきて好きなものを選ぶスタイルのようだった。昔ながらのものが時代の移り変わりとともに少なくなっていくこと、そのなかで現在もそれらのスタイルを崩さずに貫く店が魅力的にみえることなどは、日本でいう銭湯や駄菓子屋などを思わせる。

### 2. 東西文化の融合・マカオ料理

マカオ料理は、16世紀初めの大航海時代、ヨーロッパ、アフリカ、東南アジアから集められた食材や香辛料を使用し、ポルトガル料理と中国料理を融合して出来たものなどを指す<sup>9</sup>。そのような独特な誕生の仕方をしたマカオグルメの1つに、エッグタルトがある。元々はポルトガルの「パステル・デ・ナダ」が元祖とされ、そこにイギリス人のアンドリュー・W・ストウが母国イギリスのカスタードタルトの要素を加えるなどしてアレンジしたものをマカオにあ

る自分の店で売り出した。そこで「ポルトガル風エッグタルト」として人気を博したため、エッグタルトを売り出す店が増え、やがてエッグタルトはマカオの名物となった。

日本で食べられるエッグタルトはその文字どおりタルト生地だが、ガイドブックにはマカオや香港で食べられるエッグタルトはパイ生地であると紹介されていた。マカオで2つ、香港で2つほど実際に買って食べたが、確かにタルトという名前に反してパイ生地の店が多かった。しかし、日本と同様にタルト生地の店もあったため、ガイドブックのように「マカオと香港のエッグタルトはパイ生地だ」と一概には言えない。個人的に面白いと思ったのは、観光地の店と地元の人々が買い物をするような出店で値段の差が3倍以上あったこと、店舗によって甘さが控えめであったり熱々のものが出てきたりとそれぞれ個性があったことである。

## おわりに

ここまで両国の植民地時代の名残と食文化について述べてきたが、やはりどちらのテーマにも共通するのは「歴史」であるといえるのではないか。長い歴史のなかで目まぐるしく変化を遂げたものもあれば、今なお変わらないものもあった。それらは習慣、料理、建物、スポーツ、交通手段など本当に様々だったが、そのどれもが香港とマカオを知る鍵となっていたように思う。

## 【参考文献】

- 1 川本真浩「ローンボウルズの「来歴」再考」『海南史学』第55号、P.29(2017年)。
- 2 マカオ観光局 <http://jp.macaotourism.gov.mo/sightseeing/sightseeing.php?c=10> (2018年5月28日参照)
- 3 ドン・ペドロ5世劇場前碑文
- 4 民政総署ビル公式パンフレット
- 5 福永峰子・梅原頼子『香港の食事情視察報告』、P.69(2017年)。
- 6 4. 香港 - 国土交通省 <http://www.mlit.go.jp/common/000116955.pdf> (2018年5月28日参照)
- 7 同上
- 8 点心 | 香港政府観光局 <http://www.discoverhongkong.com/jp/dine-drink/what-to-eat/must-eat/dim-sum.jsp> (2018年5月28日参照)
- 9 マカオ観光局 [http://jp.macaotourism.gov.mo/dining/cuisines\\_detail.php?id=1](http://jp.macaotourism.gov.mo/dining/cuisines_detail.php?id=1) (2018年5月28日)
- 10 世界のデザート～ポルトガル起源のマカオ名物「エッグ・タルト」 <https://www.ab-road.net/asia/macau/macau/guide/gourmet/12264.html> (2018年5月28日参照)



ヴィクトリア・ピークからの眺望



実際に体験した屋内でのローンボウルズ



ジョニー夫妻との夕食の中で食べた小籠包



セナド広場前の民政総署ビル



マカオで食べたエッグタルトの一例(パイ生地)



香港で食べたエッグタルトの一例(タルト生地)

## 植民地時代を経た香港・マカオ

国際社会コース b171g263u 畑山 寧音

### ○はじめに

香港は正式名所を「中華人民共和国香港特別行政区」と言い、現在は中国の一部となっている。そして中国に返還される以前、イギリスの植民地であったことは学生時代に授業で一度は習うようによく知られている。今回のスタディーツアーでは、香港と過去にポルトガルの植民地時代をもつマカオに訪れ、授業やガイドブックで知っている知識をより深めるとともに、新しい発見を見つけたために大きく二つのテーマを立てた。「①香港が過去にそれぞれ統治されていたころの影響がどういった形で残っているのかを調査すること。②香港、マカオでの日本語・日本文化の浸透度を調査すること。」この二つのテーマを軸として、本レポートでは自分の意見を含めスタディーツアーの報告をしていく。

### ○植民地時代を経て

前章でも述べた通り、香港は 1842 年から 1997 年まではイギリスの植民地とされていた歴史をもっている。しかし実際に、植民地時代の影響がどのように残っているのかは詳しくは知らない。そこで一つ目のテーマとして挙げたように、実際に自分の目で植民地時代の影響がどのように残っているのかを調査した。

香港の街中で植民地時代の影響のものとして街中で目立ったものは“2階建てバス”や“トラム”と呼ばれる2階建ての路面電車である。これらはイギリスで有名な乗り物であり、産経ニュースによると「トラム創業時、香港はイギリスの植民地下にあった。トラム用の車両はイギリスでパーツを造り、それを香港に運んで組み立てたそう。そのため車両デザインは、イギリスのトラムと似通っているという。」<sup>1</sup>とある。植民地時代の影響がしっかりと残って、現在の香港の人々の暮らしの中に溶け込み、多くの人々が利用しているという現状を知ることができた。また Victoria Park にはイギリスが香港を支配していた 1897 年、ヴィクトリア女王 (1819-1901) の即位 60 周年を記念として建てられた銅像があり、イギリスに支配されていたころの歴史が見て取れた。他にも建物の中では、ホテルやビルの日本で一階とされるフロアが“G” (グランドフロア) の表記ということや、電気のプラグがイギリスと同じ形状という特徴もみられた。

さらに植民地時代の影響の一つとして“ローンボウルズ”が挙げられる。日本ではほとんど知られてはいないスポーツであるが、ローンボウルズは定年退職をした人から、障がい者や子供まで楽しむことのできるスポーツである。19 世紀にイングランドやスコットランドで規模が拡大していったローンボウルズは、香港にも広まり現在も盛んにおこなわれている。今回のスタディーツアーでは、現地でローンボウルズを行っているクラブに訪問し、お話や実際に競技をすることで交流をとることができた。その中で、ローンボウルズをおこなっている中学生の女の子たちと話をする機会があった。ローンボウルズは彼女たち自身にとってどのようなスポーツなのかという質問をしたとき「ローンボウルズは他のスポーツと違いほとんどの人がプロになりたいという気持ちでやるのではなく、ほかの人たちとの交流を楽しむスポーツ」「ス

1 産経ニュース 2016 年 3 月 27 日の記事より

ポーツといっても激しい動きではなく、体力など関係なく楽しめるうえに、考えることもしなくてはいけないうので頭を使うこともできる」と答えていた。また、今回の訪問で訪れたクラブの中にはインド系の“Indian Recreation Club”やポルトガル系の“Club de Recreio”といった、同じローンボウルズのクラブでも「〇〇系」というように種類の違いがみられた。私はこれらのことから、ローンボウルは誰でも取り組みやすく交流を図りやすいスポーツであり、植民地時代に香港に来ていたイギリス人を含め多くの外国人や香港の人々に流行する一つのきっかけとなったのではないかと考えた。

## ○香港・マカオにおける日本

遊川和郎著書の『香港 返還 20 年の相克』を要約すると、「現在の香港は中国からの観光客数が一番多いが、香港が中国に返還される前は、香港へ最も多くの観光客を送り出していたのは日本であり、日本の商品・日本人を相手にした商売が数多く存在していた。」<sup>2</sup>とある。このことから、香港には過去の日本人向けビジネスの残りを含め、日本に関係するものが街中にも多くあると考えられる。また、私は将来日本語教師として働きたいと考えているため、海外で日本はどのように認識されているのかということを知っておくことも必要だと考えた。そのため、「香港、マカオでの日本語・日本文化の浸透度を調査する」ということをもう一つのテーマとして設定した。

実際に香港で訪れた Victoria Peak や黄大仙祠では、香港の公用語である広東語や英語表記に並び日本語表記の案内板が用意されていた。黄大仙祠は占いが有名で黄大仙祠での占いの結果を聞くことができる占いのお店が立ち並ぶ建物が隣にあり、また風水用具のお店が立ち並ぶ場所がある。そこでは、日本人観光客だとわかると日本語で話しかけてくれるお店の人や、日本人のための日本語ができる占いのコーナーが用意されていた。このように観光地として知られる場所では、日本人をターゲットとしていると感じさせられる場面に多く出会った。観光地である場所に日本人を意識したものはある程度の想像ができるかもしれない。

観光地だけではなく街中にある飲食店でも日本と関係することを二つ感じる事ができた。一つは、飲食店のメニュー表に日本語表記があったことだ。日本語で書かれたメニュー表は、日本人からしたら所々に違和感を覚えてしまう日本語ではあったが、そのお店の人が日本人観光客のために作ったのだとわかる。もう一つは、日本語を知っている店員さんがいたことである。日本語といっても簡単な会話文程度であるが、日本人だとわかると日本語を言ってくれた店員さんが何人かいた。香港の街中では、日本発祥の飲食店・日本料理店、他にはひらがなが使われているお店も多く見られた。一方マカオでも、観光地のような日本人も多く訪れる場所ではお店の看板の日本語や日本語表記の案内板があり、日本人観光客が多いのだろうとわかる。しかし、観光地から少し離れた場所に行くと日本に関連するものはほとんどなく、香港と比べるとマカオでは日本との関係が少ないことがわかった。

ここまでは香港における日本の“良い”影響を述べてきたが、今回のスタディーツアーを通して日本が香港に良い影響を与えてきただけではないことも実感させられた。香港歴史博物館では、4 億年前から 1997 年の香港の歴史を見ることができ、その中に「日本占領期」の展示もある。日本に占領されていた 3 年 8 か月の暗黒の時代 (1941 年～ 1945 年) と呼ばれていた時の人々の悲惨な暮らしや、当時日本と戦った中国共産党指揮下の東江部隊の活動の記録が残っ

2 遊川和郎 『香港 返還 20 年の相克』

ていた。このような悲惨な占領時代の日本と香港の関わりも現代の香港に日本関連のものがある要因の一つとなっているという考えを持った。

これらのことから、街中の様子からマカオよりも香港の方が今現在は日本に関することやモノが比較的多く見られ、関わりが深いということがいえる。その要因として考えられるものの中には、香港返還以前に日本人をターゲットにしたビジネスを行っていたことや、日本の香港占領時代があり日本人との交流・関わる機会が多くあったことがつながってくると考える。

### 〇おわりに

今回のスタディーツアーでは、「①香港が過去にそれぞれ統治されていたころの影響がどういった形で残っているのかを調査すること。②香港、マカオでの日本語・日本文化の浸透度を調査すること。」を大きなテーマとして行った。植民地時代を経て、今現在もその影響が街中でも所々に残っていた。しかしそれらはそっくりそのまま影響されているのではなく、香港の街に溶け込むように少し形を変えていると感じた。また、香港に実際に訪れて現地の人が日本語で話しかけてくれるようなコミュニケーション力や、観光客に慣れ親しんだ店員さんなどの態度を感じた。このように香港の人々が外国人に慣れているのも植民地時代の影響の一つなのではないかと感じた。日本ではあまり見られないような文化の融合や、外国人に対しての接し方がとても新鮮に感じることができ、教科書やネットでは分からなかった雰囲気や新たな発見をえることができた。今回のスタディーツアーで、自分自身の考え方や見方の視野を深めることができた。

### 【参考文献】

- ・香港政府観光局公式サイト  
<http://www.discoverhongkong.com/jp/index.jsp> (2018/3/14 参照)
- ・香港の歴史街道巡り 香港ナビ  
<http://www.hongkongnavi.com/special/5041621> (2018/3/14 参照)
- ・遊川和郎 『香港 返還 20 年の相克』 日本経済新聞出版社 2017/6/21 出版
- ・産経ニュース 2016 年 3 月 27 日の記事より  
[www.sankei.com/premium/news/.../prml603270034-n1.html](http://www.sankei.com/premium/news/.../prml603270034-n1.html) (2018/3/16 参照)
- ・認定 N P O 法人ローンボウルズ日本 [bowls.jp/whats\\_bowls/bowls-history/](http://bowls.jp/whats_bowls/bowls-history/) (2018/3/16 参照)
- ・香港の歴史街道巡り 香港ナビ  
<http://www.hongkongnavi.com/special/5041621> (2018/3/18 参照)
- ・How Travel  
<https://www.howtravel.com/asia/china/hong-kong/hon-sightseeing/hon-building/wong-tai-sin-temple/> (2018/3/18 参照)

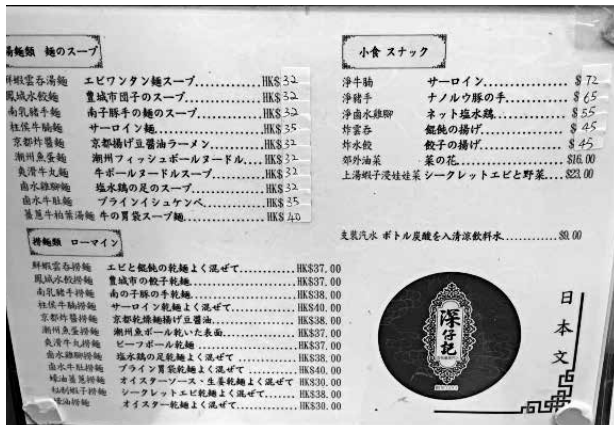




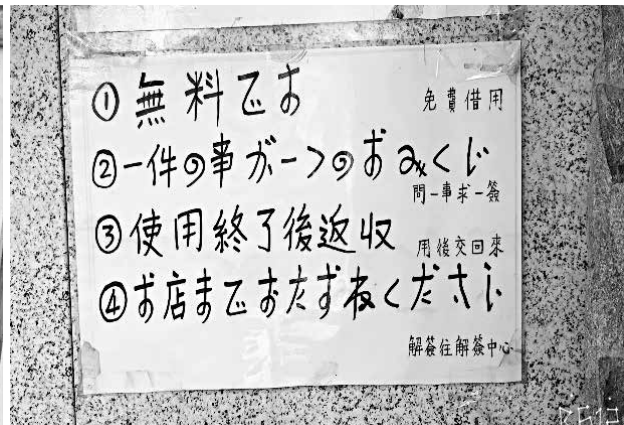
(The Peak から見た香港)



(二階建て路面電車)



(香港で見つけた日本語 I)



(香港で見つけた日本語 II)



(ローンボウルの実践)



(マカオ・セナド広場)



(Indian Recreation Club)



(Club de Recreio)



# 「国際社会実習（スタディ・ツアー）」および「国際社会実習（国内調査実習）」について

岩佐光広（高知大学人文社会科学部）

赤池慎吾（高知大学地域連携推進センター）

## はじめに

以下の報告は、高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース（旧人文学部国際社会コミュニケーション学科）の専門科目「国際社会実習（国内調査実習）Ⅰ」および「国際社会実習（スタディ・ツアー）Ⅰ」として、2017年度に高知県東部中芸地域（安芸郡奈半利町、田野町、安田町、北川村、馬路村）で実施した実習についての報告である。参加した学生による報告に先立って、本実習の立案の経緯、実施した活動の概要などについて簡単に説明しておきたい。

今回の実習は、「中芸地域の日本遺産の「サブストーリー」を発掘しよう！」というテーマのもとで実施した。この企画の立案の背景には、実習の実施地である高知県東部に位置する中芸地域における「日本遺産」認定をめぐる産学官民の一連の動きがある。まず、その背景について概説し、それを踏まえ本実習のテーマを立案した経緯と実施した実習の概要について説明する。

## Ⅰ 背景としての中芸地域における日本遺産認定

中芸地域は、古くから林業で栄えた地域である。銘木・魚梁瀬杉をはじめ、多くの木材を産出し、安田川と奈半利川に流して河口へ、そして海から日本全国へと送り出してきた。明治期から昭和30年代にかけて、森林資源を運び出すためにこの地域一帯に敷設されたのが魚梁瀬森林鉄道である。その総延長は、本線・支線を合わせて300キロメートルにも及び、西日本最大規模を誇った。しかし、昭和38年（1963年）、魚梁瀬ダムの建設が着手されるとともに森林鉄道は廃線となり、その軌道は道路に姿を変え、木材運搬はトラックによってなされるようになった〔赤池 2018：90〕。

森林鉄道が廃線を迎えたこの時期は、この地の中核的な産業であった林業を支えていた天然林が次第に枯渇していく時期でもあり、中芸の人びとは、林業に代わる新たな産業を探さなければならなくなった。そこで力を注いだのがゆず栽培である。中芸のゆず栽培のはじまりは江戸時代にさかのぼるとされる。古くからこの地で育てられてきたゆずの魅力と価値にあらためて注目し、それを産業化すべく、森林鉄道の軌道が敷かれた川沿いにある田畑をゆず畑に変え、木材を運び出していた山間部では、山面の限られた土地に石垣を築き、段々畑を開いた。こうして産業化された中芸地域のゆずは、現在では全国のゆず生産量の25パーセントを占めるにいたる。中芸地域は、日本一のゆずの産地となった〔赤池 2018：90〕。

こうした歴史をもつ中芸地域と私（岩佐）が関わりをもつようになったのは、2015年からのことである。中芸地区森林鉄道遺産を保存・活用する会の協力のもと、人文社会科学部の教員と赤池らで始めたインタビュー調査に参加したのがきっかけである。この調査では、「森林

鉄道と暮らし」をテーマに、「森林鉄道があった時代」から「森林鉄道がなくなった時代」にかけての日々の暮らしの変化を、中芸地域で暮らしてきた人たちの語りから明らかにすることを目指している〔岩佐 2017〕。現在までに20人ほどの方々にインタビューを実施し、その成果は、学会発表〔赤池ほか 2016〕だけでなく、「高知人文社会科学会 2015 年度シンポジウム」（2016 年 3 月 5 日、於集落活動センターなかやま）、「林鉄と暮らし」のオーラルヒストリー研究報告会「地域の「記憶」から見えてきた新しい中芸地域の姿」（2017 年 3 月 11 日、於集落活動センターなかやま）などを通じて、地域住民との共有も試みてきた。

これらの活動を続けるなかで、2016 年、中芸地域において「日本遺産」申請に向けた動きが立ち起こった。日本遺産とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて、日本の文化や伝統を語る「ストーリー」を「日本遺産」として文化庁が認定する事業である。その目的は、それぞれの地域の有形・無形の文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内外に発信していくことで、地域の活性化を図ることにある<sup>1</sup>。上述した林業からゆず栽培への産業の歴史を軸にこの事業に挑戦すべく、2016 年 8 月、中芸 5 町村を中心に、高知県、住民団体、観光協会、高知県東部観光協議会、四国森林管理局、高知大学などが連携して「〔魚梁瀬森林鉄道〕日本遺産推進協議会」（以下、協議会）が設立された。私たちは、日本遺産申請の核となるストーリーの作成を担当するストーリー部会のメンバーとして参加することになった<sup>2</sup>。

その後、外部講師を招いての連続講演会や大小さまざまなワークショップ、調査活動、広報活動などを重ね、2017 年 1 月に「森林鉄道から日本一のゆずロードへ——ゆずが香り彩る南国土佐・中芸地域の景観と食文化」と題したストーリーを文化庁へと申請した。その概要は、以下の通りである。

南国土佐の東に位置する中芸地域。かつて西日本最大の森林鉄道が駆け巡った中芸は、林業に代わる産業としてゆず栽培に力を注ぎ、今や日本一の生産量を誇っている。木材を運んだ森林鉄道の軌道は、ゆず畑の風景広がる「ゆずロード」に生まれ変わったのである。

川沿いや山間に広がるゆず畑を、小さくかわいい白い花、深く鮮やかな緑の葉、熟すとともに濃くなる黄色の果実が季節ごとに彩る景観。ゆず寿司などの風味豊かな郷土料理。中芸のゆずロードをめぐれば、ゆずの彩りに満ちた景観と、ゆずの香り豊かな食文化を堪能することができる。

申請から約 3 ヶ月後の 2017 年 4 月 28 日、「日本遺産」の認定を受けることができた。そして、2017 年 10 月 1 日の日本遺産認定記念シンポジウム「中芸みんなの日本遺産」（於田野町ふれあいセンター）<sup>3</sup>を皮切りに、本格的に事業が開始し、現在に至る。

## Ⅱ 実習テーマの立案: ストーリーからサブストーリーへ

以上の経緯において、私たちは日本遺産申請に関連する事業やインタビュー調査に取り組む

1 文化庁「〔日本遺産 (Japan Heritage)〕について」([http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon\\_isan/](http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/))、2017 年 3 月 30 日閲覧。

2 ストーリー作成の（悪戦苦闘の）経緯については、赤池〔2018〕を参照されたい。

3 シンポジウムの内容については、『季刊高知』No.67「センター特集 日本遺産認定記念シンポジウム「中芸みんなの日本遺産」レポート」を参照されたい。

なかで、いくつかの課題があることに気づくようになった。その1つが、中芸地域に暮らす人たちの「生きられた歴史」をいかに描き出すか、という点であった。日本遺産に申請したストーリーで描かれている中芸地域の特色や魅力は、中芸地域で生きてきた人たち、生きている人たちが営んできた日々の暮らしに根ざしたものである。その暮らしぶりは、同じ地域で暮らしているといっても、世代や性別、生業や仕事、生まれや育ち、これまで経験してきたことによって違いもある。それぞれの人たちの個別具体的な経験に根ざした「生きられた歴史」は、共通するところをもちながらも、実に豊かな多様性をもっている。しかし、限られた紙幅のなかで、「地域」の魅力を語ることに主眼を置いて書かれたものである日本遺産のストーリーは、その性格上、生きられた歴史の共通する部分を抽象して描かれたものであり、多彩に語られる個別具体的な経験はどうしても捨象せざるを得なかった。この人びとの「生きられた歴史」をいかにすくいあげ、それによって日本遺産のストーリーをどのように肉づけしていくか。このことが課題として浮かび上がってきたのである。

この課題に取り組むためのヒントになったのが、赤嶺淳が中心となって刊行しているシリーズ「グローバル社会を歩く」である。このシリーズは、名古屋市立大学人文社会科学部の授業の一環として行われた「聞き書き」の作品をまとめたものである。ここでいう「聞き書き」とは、個人の生きざまについて訊き、その人が生きてきた時代を訊ね、その内容をストーリーに仕立て直したもののことである〔赤嶺（編） 2011： i〕。たとえば、シリーズ第1巻である『クジラを食べていたころ——聞き書き 高度経済成長期の食とくらし』（赤嶺（編） 2011）は、学生が親族を中心に行った聞き取りの成果をもとに、「日本社会が劇的な変化を経験してきたとされる高度成長期について、変化の諸相を「食」の視点から切りとる」（赤嶺（編） 2011： ii）ことを目的としたものである。それぞれの「作品」には、それぞれの語り手が生きてきた時代、場所、立場、経験に根ざした生きられた歴史がいきいきと描き出されており、そこから「クジラが食べられていたころ」の日本の暮らしとその変化を垣間見ることができるものである。くわえて、聞き書きのあとに付されている「聞き手のつぶやき」からは、インタビューに取り組んだ学生たちが試行錯誤しながらも、多くの経験と学びを得ていることも伺えた。

「グローバル社会を歩く」シリーズをあらためて読み返ししながら、上記の課題に対して、学生が関わることでできる形でインタビューを実施し、中芸地域に暮らす人たちの生きられた歴史にアプローチできないかと考えるようになった。そうしたイメージのもと、本コースの専門科目「国際社会実習（国内調査実習）」として企画したのが、今回実施した実習である。

まず、赤池と岩佐であらためて問題意識を共有し、実習の基本的な枠組みを決めていった。そこでは、日本遺産のストーリーには十分に描かれていない地域住民の個別具体的な経験に根ざした生きられた歴史を「サブストーリー」として位置づけ、それを聞き取るインタビューを活動の中心に据えることを決めた。そのうえで、学生の多様な関心に応えられるように、(1) 文化人類学・社会学・民俗学等の中心的な調査方法のひとつである「聞き取り調査」の方法論について学ぶ、(2) 地域住民の「生きられた経験の語り」を通じて、中芸の暮らしとその歴史を学ぶ、(3) 日本遺産認定に伴う地域活性化の取組みについて学ぶ、という大きく3つの目的を掲げ、インタビューに加えていくつかの補足的なアクティビティを行うことにした。なお科目の履修対象学年の関係で、1回生は「国際社会実習（スタディ・ツアー）」として、2回生以上は「国際社会実習（国内調査実習）」として開講することにした。

### Ⅲ 実習における活動の概要

以上の企画のもと、2017年11月に2回の説明会を行った。結果、人文社会科学部の学生が4名、農林海洋科学部の学生が2名、計6名の学生が参加することとなった。その後、12月に事前学習会を行い、インタビューの基本的なやり方を説明するとともに、実習の細かな打ち合わせを行った。

中芸地域での実習は、2回に分けて実施した。1回目は、2017年12月22日から24日にかけての2泊3日の日程で実施した。2回目は、2018年1月12日から14日にかけての2泊3日の日程で実施した。実習に参加した学生は、1回目が5名、2回目が4名である。実習の大まかなスケジュールは次の通りである。1日目は、移動と宿泊先で事前の打ち合わせを行った。2日目は、午前中に日本遺産の構成文化財等を訪問し地域理解を深めるための活動を行い、午後にインタビューを実施し、夜に振り返りを行った。3日目は、午前中にインタビューを行い、午後に帰路についた。

インタビューは、安田町の集落活動センターなかやまにおいて実施した。集落活動センターなかやまと赤池が連携を取りながら、計7名の地域住民にインタビューイーを引き受けてもらうことができた。インタビューイーの平均年齢は約75歳、女性6名、男性1名であった。インタビューは、学生が2名のグループを作り、1名の方に話を聞くという形をとった。インタビューの時間は1名につき約2時間で、その内容は許可を得てICレコーダーで録音した。インタビューを終えたあとに、協力してくれた地域住民に対して、学生から印象に残ったことを話してもらい、それを踏まえて参加者全員で話をする機会をもつことができた。また、インタビューの際に、自分で作った着物や、杣として働いていたときに使っていたノコギリなどを持ってきてくれた方もおり、生きられた歴史を体現するモノに実際に触れるという貴重な経験もすることができた。

地域理解のための活動としては、馬路村農業協同組合、(株)北川ゆず王国、(株)北川ジャルダンの3社を訪問した。馬路村農業協同組合では、ゆず工場を視察し、ゆず産業の歩みについて学んだ。北川村ゆず王国では、EU輸出向けの契約農園を視察することができ、地域から世界へ発信される高知県農業の現状と最新の取組みを学ぶことができた。そして北川ジャルダンでは、高知県東部地域一の入込客数を誇るモネの庭を訪問し、副支配人からマーケティングの視点と情報発信に関する知見を得ることができ、観光振興による地域活性化の現状について学ぶことができた。

以上の実習を踏まえた事後学習として、大きく2つの課題を課した。1つは、ICレコーダーで録音したインタビュー内容の文字起こし作業である。学生間で手分けして、録音したすべてのインタビューの文字起こしを行った。もう1つは、2018年2月3日に集落活動センターなかやまで開催した、成果報告会での報告である。インタビューに協力頂いた方を中心に8名の地域住民の参加があった。学生には、実習での経験と文字起こしの作業を通じて感じ考えたことをまとめてもらい、そのことを報告してもらった。

#### おわりに

以上、簡単ではあるが、本実習の概要について説明してきた。以下には、上述した実習に参

加した6名の学生を代表して、3名の学生の報告を掲載している。行動をともにしながらも、それぞれの学生ごとに感じたこと、考えたことには違いがあり、それぞれの視点から中芸という地域、そしてそこに暮らす人たちの「生きられた歴史」に触れたことが伺える。彼女たちがこの実習を通じてなにを感じ考えたのか、是非一読いただければと思う。

最後に、本実習に関わる諸経費は、高知大学平成29年度「学生の県内定着または雇用創出に係る研究経費」による。実習の企画・実施においては、中芸のゆずと森林鉄道日本遺産協議会、集落活動センターなかやまをはじめとする中芸地域の各組織からの多くのサポートを頂いた。そしてなにより、インタビューにご協力いただいたみなさんのご協力、参加学生のみなさんの頑張りがあっての本実習であり本報告である。みなさんに記して謝意を申し上げたい。

## 参考文献

赤池慎吾 2017 「歴史や文化財から地域の魅力を考える——「日本遺産」認定を事例に」『土佐史談』266：90-94。

赤池慎吾ほか 2016 「「魚梁瀬森林鉄道と暮らし」のオーラルヒストリー研究」『2016年度林業経済学会秋季大会』、2016年11月12日、於島根大学、口頭発表。

赤嶺淳（編）2011 『クジラを食べていたころ——聞き書き 高度経済成長期の食とくらし』、新泉社。

岩佐光広 2017 「高知大学による魚梁瀬森林鉄道に関する調査について」『高知人文社会科学会』4：71－75。

野並良寛（クリケット）（編）2017 『季刊高知』67、弘文印刷株式会社。

# 魚梁瀬森林鉄道における交流について —インタビュー調査を通して—

人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース・2年生

立田 瑳彩

## はじめに

このレポートでは、高知県の中芸地域5町村（奈半利町、田野町、安田町、北川村、馬路村）の日本遺産認定に伴い行った、2017年度「国際社会実習（国内調査実習）Ⅰ」の調査についてまとめる。まずⅡでは、インタビューをするにあたって調査前に着目した「交流」について説明する。Ⅲでは、インタビューの概要を述べる。次にⅣでインタビューを通して調査後に考えたことについて述べていく。最後にⅤで全体のまとめを行なう。

## Ⅰ 「交流」

調査では日本遺産のサブストーリー設定として、中芸地域の暮らしでの「交流」に着目した。この「交流」というのは、初対面の個人と個人が関係を築く過程を意味している。

林業で栄えていた明治末から敷設が始まり昭和中期頃の廃止まで、5町村を円形に繋ぎ木材を運ぶ魚梁瀬森林鉄道が走っていた。この森林鉄道を走らせるために仕事や役割ができたことや、森林鉄道を移動の手段として利用していた人同士が「交流」する機会があったと考えた。5町村を繋ぐ森林鉄道の敷設、利用によって暮らしの中にどのように「交流」が生まれたのかについてインタビュー調査した。

## Ⅱ 概要

インタビューでは、森林鉄道が走っていた頃から廃止されるまでの生活の調査をするために、インタビューの親や兄弟との思い出や学生時代の経験について主に聞き取った。インタビューは現在60～80代なので、昭和10年から30年頃の学生時代や結婚以前、結婚後の子育てにおいて暮らしの中で森林鉄道がどのような役目を果たしていたかを時代背景と共に聞いた。

ここでいう学生時代は主に小学生の頃である。第二次世界大戦中、終戦後で父親の徴兵や戦死して不在である家庭もあり、働き手の不足による経済格差ができていた。中学校が創設し始められている頃であったが、仕事をするために進学しなかった人もいた。両親がいる家庭であっても小学生から下校すれば親の仕事の手伝いに徒歩で山に登って木を運び、欲しいものがあれば自分でトロッコの停留所へ行き、家で育てた果物を乗客に売るなどしてお金を稼がなければならなかった。このように経済格差があったとは言え、自家製のしょうゆや味噌をおすそ分けをすることや、お風呂を沸かした家に行ってお風呂を数日置きに行っていたなど、隣近所が助け合って暮らす状況であった。

就職して働き出してから、娯楽として友達と映画を観に行くときにトロッコに乗ることはあった。トロッコは一日に上り下りの2回程度だけしか走らないため、行きはトロッコに乗り、

帰りは自転車で帰るという風にしていた。小学生の時は、小学生だけではトロッコに乗って映画に行くのは危ないと親が許してくれなかった。

トロッコを利用することは、経済的な理由からできるだけ避けていたようだ。山を下ったところにある高校へは、自転車で登校する人やトロッコに乗る人もいたらしい。しかし親の仕事の手伝いや兄弟の世話などの理由から、高校へ進学することは珍しかった。それ以外でトロッコを利用するのは、買い物や病院へ行くときくらいに限られていた。田んぼや畑で米や野菜を育てて自給自足で生活していたので、それで補えないものが必要なときなどに買い物をするという生活だった。病気などの緊急事態の時には、電話が必ず一家に一台あるというわけではなく救急車は呼べないため、トロッコに乗って山を下ったところにある病院へ行った。

通学や通勤に頻繁にトロッコを利用するということはなかったようだが、緊急時には人を運ぶこともあった。他にも時計代わりにして、トロッコが走る時間を把握して生活のリズムを作っていたようである。

### Ⅲ 考えたこと

インタビューを通して考えたことは主に三つである。まずインタビューイの話した「貧しい暮らしの中の喜び」について、次に「想像すること」について、最後に「交流」についてである。

まず「貧しい暮らしの中の喜び」について考えた。インタビュー中インタビューイは昔のことを思い返しながらか、暮らしは貧しかったがその中に喜びや楽しみがあったと話していた。電話やテレビや女中さんを雇うことは言わば裕福さの象徴で、それらを持っている家庭は限られていた。金銭の面で見ると裕福な家庭よりも貧しく、労働や子育てにも時間をより要するため負担がある。しかし、そういう暮らしの中で喜びや楽しみがあったのは、近所付き合いがあったからだと考える。おすそ分けやもらい風呂などをしていたことから、近所同士が持ちつ持たれつの関係であったと分かる。お互いの家庭がお互いの暮らしを助けるもしくは助けてもらうために支え合っていたのだと思う。

お祝い事も楽しみだっただろう。親戚が一斉に集まる正月に向けてお寿司や昆布巻き、ようかんなどを盛り付ける皿鉢料理を親と一緒にこしらえたり、母が時間をかけて作ってくれた着物を羽織ってお祝いしたりしたらしい。このころお年玉をもらうことはなかったようだが、着物をもらうことはお年玉のような特別なプレゼントだったのだと思う。誰かのために何かすることや自分のためにされることに、喜びや楽しみを感じていたのだと思う。

次に「想像すること」について考えた。インタビューで聞いたその内容をどうすればインタビューイの経験に近い感覚で理解しようと思えるのか考えた。今回インタビューイの話した内容は現在より過去のことで、インタビューイは記憶を辿りながら話しているため全ての内容が「正確」であるかは分からない。そしてインタビューアの受け取り方により、インタビューイの意図通り受け取られないかもしれない。しかし、その内容の端々に出てくる言葉などや話しぶりから、インタビューイの人柄や感情を感じ取ることができる。面と向かってインタビューイの感覚の記憶を共有しながら話を聞くことができることで、インタビューイの経験に近い感覚の理解を試みることができると思った。

これまで学校の授業で聞いてきた「昔の話」は大抵「歴史」の枠組みで、想像しても現実味のない話のままであった。書物やあらゆるメディアを調べることであらゆることに想像を膨ら

ますこともできる。しかし、今回行ったインタビューでは経験者の表情や素振り、声のトーンなどから想像できることはそれ以上であった。何事に関しても想像上のことでしかないかもしれないが、インタビュー中のあらゆる「情報」を得ることがインタビュー어의経験に近い感覚を理解する手がかりになるのではないかと考えた。

最後に「交流」について考えた。調査前に設定した「交流」では、初対面同士の交流を意味していた。特に森林鉄道に乗車することで5町村以外の人とも出会い関係が築かれたのではないかと予測し、その関係の築かれ方などを調査するつもりであった。しかし調査対象が限定しすぎていることもあり、詳しく調査はできなかった。

ただインタビューを通して、「交流」においての調査対象者を必ず初対面同士に絞る必要はないと思った。あるインタビュー어의話でインタビューの方が学校帰りに森林鉄道が走っているのを見つけると運転手さんが止めて待ってくれたり、手を振ってくれたりした話をしていて、その一方で同じ家で暮らしていても暮らしづらかったといった話をする方もいた。そのため、お互いがどう関係をつくるかということに、ある時点での関係がどうであるかを考慮しない「交流」を調査する中で、関係の築かれ方を知れるのではないかという考えに至った。

## おわりに

以上、日本遺産認定に伴い行ったインタビュー調査で、暮らしの中の「交流」を念頭に置いて調査をした内容を述べてきた。森林鉄道が走ることで中芸地域への人びとの移動が増えたり、映画などの娯楽を手軽に楽しめたりした。また、緊急時の搬送などにも利用されるなど生活を支えるのにも役立った。インタビュー어의話す暮らしの隅々に森林鉄道があり、ただの運搬車や乗り物として利用されたものではなかったと分かった。様々な場面で森林鉄道は人びとの交流を生んだと分かった。



## 国際社会実習Ⅰに参加して

人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース・2年生  
高橋 麦帆

まずはインタビューが今までどのような人生を歩んできたのかについてお話を聞き、その方を知るということをした。自分たちのペアは主に食事に関することをテーマとし、それらを軸にしてインタビューを行った。4人の方にインタビューをさせていただき、食事などの生活の様子、近所付き合い、魚梁瀬森林鉄道、学校や勉強のことなど様々なジャンルの話を聞くことができた。

聞いた内容として、インタビュー全員から近所付き合いの話が出てき、普段から頻繁に近所の人の家に行って話をしたり物をあげたりもらったりというやり取りを行ったりしており、この地域では近所付き合いが盛んであることがわかった。他にも、近所の人の家でお風呂をもらう「もらい風呂」という習慣があり、お風呂をもらったら今度は自分の家でお風呂を沸かし、他の家の人にも入ってもらうという当時の近所付き合いの様子も伺えた。

子どもの頃の話では、当時勉強よりも家の仕事が優先で、なかには出かけた帰りには薪など生活に必要なものを必ず背負って帰ってくるというのが当たり前だったという方がいた。中学校ではクラスが高校へ進学する組と高校へ進学せずに農業をする組とに分けられ、授業の内容そのものが違っていてつらい思いをしたと話す方もいた。女の子が家の仕事をせず勉強をしていたら親に怒られるので、夜家族が寝た後でこっそり勉強していたというエピソードもあった。中にはどうしても高校へ行きたくて親の反対にも折れずに保証人の判をこっそり押して通うことになったという方もいて、勉強に対する並々ならぬ意欲があったということを強く感じた。当時と違って今の子どもたちは家のことより勉強が優先で、勉強をして親に怒られるということとはあまりないように思う。勉強より家のことが優先だった当時の価値観がいつ頃から変化して逆転していったのかが気になったのと、今の子どもたちは勉強が嫌などと言ったりするが、当時の人たちは勉強したくても当たり前にはできなかったことを考えると今の子どもたちが当たり前で勉強できる環境にあるということはあるがありがたいことであると考えた。

魚梁瀬森林鉄道に関しては、子どもを背負ってトロッコに乗ってブレーキを締めたりという運転をしていたという話を、当時実際に仕事をしていた女性から聞いた。今と違って労災などではなく危ない仕事であったが給料は高くなかったようである。別の方の話によると、学生時代通学に森林鉄道を利用する時、運転手が早く来いと言って乗るのを待っていてくれたという。田んぼで畑仕事をしていた時には森林鉄道が通ったので昼の時間になったということがわかり、時計がわりにもされていたようだ。森林鉄道は地域の人々の生活に何かしらの形で関係していたということがわかった。

食事についての話では、食材は自分の家で作ったものか地元のものを使うことが多いという方がほとんどだった。神祭や結婚式などの際にはゆずを使用した田舎寿司を作り、今ではこの地域の伝統的な料理となっている。正月には豪華な皿鉢料理を作って必ず家族がそろうようにしているという方もいた。

正月に関するエピソードとしては、朝起きると枕元に母親が作ってくれた着物が置いてあって、それを着て家族みんなでご飯を食べた後、神社に行くのが楽しみだったという話があった。

正月だけでなく、家族が集まったりする行事には結婚式、節分、七夕などがあると話を聞いてわかった。行事など特別な時には特別な料理を作り、家族が集まって一緒に過ごすことを大切にしていると感じた。

家事などの普段の生活の様子については、川岸から流木を拾ってきてお風呂を沸かすために使っていたという話を聞いた。そしてお風呂に使う水は谷からひいてくるというように、自然のものを最大限に活用して生活を営んでいたことがわかった。料理に使う薪も山から拾ってきて、ご飯を炊くのにできた燗を今度は七輪へ入れてお茶を沸かしたり魚を焼いたり、使えるものは無駄にすることなく使うということは日常の身についた動作だったという。現在の自分たちの生活は、料理をする時には火を一からおこさなくともガスなどで簡単に火をおこせて調理することができ、お風呂を沸かす時にはガスのスイッチを押して蛇口をひねれば何もしなくても勝手にお湯が出てくるというような生活を送っている。今のような生活でなかった当時の人々は、今の私たちが計り知ることができないような苦労をしていたのであろうと考えさせられた。

自分が少し興味のあった家長制についても聞いたところ、お風呂は男性が先に入り、父親が男の子を入れていたという話を聞くことができた。また父親が子どもを抱いたりあやしたりおしめを替えたりすることは大変なことだったそうだ。座順については、結婚式で女性は上座には座らない、普段食事する時は女性が流しに近い方に座っているという情報も得ることができた。このように生活のあらゆる場面で家長制に基づく規範が存在していたわけだが、現在では男性より女性の方が上に立つことも多い。いつ頃からどのように家長制がなくなっていったのかということに興味を湧いた。他にも、兄弟の嫁を比較すると、次男、三男の嫁が長男の嫁より年上でも長男の嫁の方が偉いということも聞き、嫁にまでも家長制が反映されていることに驚いた。

以上紹介したように様々な話が聞けたが、聞いた話をまとめて全体的に見ると、家族のつながりを大切にしているのと同時に、家族だけでなく近所の人や他の家族との付き合いも深く、人と人とのつながりがますます希薄になっている現代では見習うべきことが多々あると感じた。また自分とインタビューした方々が送ってきた生活は大きく異なっており、当時は何をするにもほぼ一から始めなければならず、現在の暮らしとの苦勞の差が大きく生活の質が違うということに改めて気づくことができた。

今回インタビューを行ってみて、インタビューの話す内容に添うようにしつつ、自分の聞きたいことについても相手に話を振るということはとても難しいことだと実感した。インタビューは聞いた話を上手に広げていき、かつ自分の知りたいことにも相手が触れるように質問していく能力が必要であるということがわかった。先輩方の話を聞いて、ただ単に昔はここが良かった、今はここがだめというような現在と昔の比較をするのではなく、例えば昔は当たり前に勉強できなかったけど今はできる環境にあるから頑張ろうとか、昔のものを無駄遣いしない生活を見習おうとか、比較したうえで様々なことを考える機会を得られたことが今回自分にとって大きな収穫だったと感じる。さらに、インタビューを行ってここで暮らしている人々がここの地域の特色であり魅力でもあるということがわかり、今回実習に参加して良かった。

## 国際社会実習Ⅰを通じて

農林海洋科学部・1年生

陶山 智美

2017年12月23、24日と2018年1月13日に、中芸地域に暮らしておられる3名の方にインタビューを行い、中芸地域の日本遺産にまつわるお話を聞かせていただいた。私が特に興味を持っていたテーマは、林業および森林鉄道についてである。農学部として森林に興味があったことと、木材を運ぶ列車とはどういうものなのか純粋に興味があったというのがその理由だった。

Nさんは生まれた時から中山地域で暮らしておられる女性で、おもに農業や酒造会社での仕事に携わっていた。加えて、21か22歳で結婚するまでの少しの期間、彼女は森林鉄道の連絡所で働いていた。連絡所は、山の方から下りてくる車両と町の方から上ってくる車両が鉢合わせにならないよう、電話で連絡を受け取る場所である。例えば、運転手から「今上がってもかまなか」と電話がかかってくるので、Nさんが「かまいません」と言うのと軌道の切り替えが行われて、車両が鉢合わせることなく進めるのだそうだ。

客として汽車に乗ったことも何度かあり、町の方へ映画を見に行くなどお出かけの時に利用したとのことだった。30人くらいが座れる、今のJRの汽車と似たような車内だったそうだ。「命の保障はしない」という文言が切符に書かれているくらいだから危険はあったのだろうが、Nさんは危険を感じたことはなく、木を積む以外に人だけを運ぶ便も普通にあったとのことだから、森林鉄道はごく日常的に移動手段の一つとして住民の生活に溶け込んでいたことがうかがえる。

Yさんは柚として天然林の木を切ってこられた、プロの木こりである。柚は6～8人のグループを作り、営林署から仕事をもらって山の中の1つの区画を請け負った。その後くじ引きでそれぞれがどのあたりを切るかを決め、ひたすら1人で木を切るのが彼らの仕事であった。4尺5寸（約136cm）ののこぎりや受け切りじょうな、面切りじょうなといった道具を駆使して、直径2mほどの大木を一人で切っておられたというから驚きである。ただ、まったくの個人プレイというわけではなく、くじ引きで条件の良い所を引いた人は悪い所の人にお金を払うなど、作業自体は個人のものであっても同業者の間でわだかまりの残らないように工夫がされていた。

木材の値段については、現在のように市場で決められるのではなく、柚と営林署の主任とが話し合って決めていたらしい。木材の太さと場所の良し悪しから、柚がおおよその値段を計算して厘代交渉を行った。双方の主張がまとまらず大げんかになったこともあったそうだ。

山仕事に携わっていたのは柚だけではない。ヒヨは10人ほどのグループを作り、柚が切った木材を列車が積んで行けるよう、下まで降ろしてくる。また造林主は木を切ったところに新しく木を植え、持続的な森林を作っていた。これらの人たちをまとめていたのが営林署で、それぞれの職種の人が深く交わることは無かったにせよ、全体として一つのまとまりとなって林業のサイクルが機能していたようである。

Yさんの子どもの頃（昭和20年頃）の話もしてもらった。通学路は鉄道のレールだったそうで、子どもたちはみんなレールの中を歩いて学校まで通っていた。カーブで列車が減速したときにこっそり飛び乗ったり、いたずらでレールに石を置いたり男の子らしいやんちゃもし

たそうだ。

Hさんは中山中学、中芸高校の1期生で、農業をはじめ様々な仕事をされてこられたパワフルな女性である。その様々な仕事の中には、森林鉄道関係の仕事も含まれている。子どもを背負いながら早朝に木材をトロヘ積んだり、車両の上に乗ってブレーキをかける危険な仕事をされたり、また汽車の運転手もされたそうだ。女性がやってはいけないという仕事は当時無く、それぞれができる仕事をするという考え方のもと、今であれば男性がするような仕事を女性が担うこともあったようだ。

また、汽車の駅には良心市のように、柿や栗がかごに入れて売ってあったという話も教えていただいた。それは地元の子どもたちがお小遣い稼ぎのために置いていたもので、乗客は誰も盗んだりせず、きちんとかごの中にお金を入れていったそうだ。子どもたちにとって、森林鉄道は貴重な現金収入の場となっていたようである。

このように、まったく異なる人生を歩んできたお三方であっても、生活のどこかに森林鉄道との関わりがあったことがうかがえた。営林署から仕事を受けて杣、ヒヨ、トロヘ木を積む人、運転手やブレーキをかける人、連絡手、木を降ろして船に積む人へと、林業や森林鉄道に直接的に関わっている人が多くいる。その一方で、林業関係者でなくても、通学、町へのお出かけ、小遣い稼ぎ、また今回の話では出なかったが嫁入り、というように地域住民の生活の端々に森林鉄道の存在があったと考えられる。中芸地域で暮らしてきた人々の思い出のどこかに必ず、森林鉄道についての記憶があり、それらの思い出を集めていくことで森林鉄道というものの全体像が見えてくることが分かった。

これら個人個人の思い出から得られる情報は、本や記録を読んでも残ってはいない。インタビューを通してサブストーリーを発掘するという今回の実習の意図が、実習を終えて少し分かったように思う。すべてのものには必ず誰かから見た主観が入っているので、それぞれの人のレンズを通して見た森林鉄道の姿が多種多様にあるはずである。色々な方からお話を聞くことで、事実しか載っていない記録からは知ることのできない、多種多様な森林鉄道の姿を知ることができると思った。インタビューを通してそれを知ることのできる楽しさを、今回学べたように思う。

一方で、人の話を聞くこと、上手に引き出すことの難しさを感じた実習でもあった。欲しい情報をズバリ聞くのではなく話の中で自然と出てくるようにしなければ、本当にその人が思っていることとは違う答えが出てきてしまうことを事前に学んだので、それをうまく引き出そうと思ってインタビューに臨んだ。しかし、欲しい情報とは違う話が續いたり、欲しい情報についてはよく知らないと言われたりして、会話が止まってしまうこともあった。

また、私がインタビューするときに気を付けていたことの一つに、自分が聞かれて困るような質問をしない、つまり自分の感覚で質問の良し悪しを考えることにしていたが、私が生きていない時代を生きてきた方とは、色々なことにおいて感覚が違うことに気付いた。例えば、生まれ育った地域から別の地域へ行くことの大変さや、結婚、職業選択の自由さについてなどである。また、これはどの人に対しても言えるが、それぞれが個人的に抱えている事情や信条もあるため、どのように聞けば相手が話しやすいかを考えるのは非常に難しいことだった。

相手の思いが上手く汲み取れない歯がゆさも多く感じて、人の話を聞くことの奥深さを思い知ったが、楽しいと感じたこともまた事実なので、想像力を膨らませることを諦めずにインタビューの腕を磨いていけたらと、初めてのインタビュー調査を通じて考えた。

高知大学人文社会科学部 人文社会科学科国際社会コース  
「2017年度 国際社会実習報告書」

2018年7月 発行

編集・発行 高知大学人文学部国際社会コミュニケーション学科  
高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース  
〒780-8520 高知市曙町 2-5-1  
TEL 088-844-8425  
FAX 088-844-8249  
<http://jinbun.cc.kochi-u.ac.jp/kokusai/>

印刷・製本 株式会社リーブル  
〒780-8040 高知市神田 2126-1  
TEL 088-837-1250  
FAX 088-837-1251

2017 年度

# 国際社会実習報告書

台湾・オーストラリア・北京・香港 / マカオ・魚梁瀬